

---

# 現代ギルド

あに

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

現代ギルド

### 【Nコード】

N7549U

### 【作者名】

あに

### 【あらすじ】

RPGによくあるギルドが現代に存在し、魔法の代わりに稀に特殊な能力『SAI』をもつ人間が生まれる世界……—そんな世界に、能力者殺しと呼ばれる最高ランクの少年、志方風芽は生きていた。外国で仕事をしていた彼は母に懇願されたあげく日本に呼び戻され、学校に通うことに。銃の常備は普通？殺しも容認？警察とは犬猿の仲？彼にとっての普通と学生にとっての普通がすれ違って行く中、次から次へと事件がやってくる。

## 01 とある地にて

よく、RPGで見るギルドというものはなんとも簡単なものだ。

剣を持ったり魔法を使ったりする人間がパーティを組んで冒険をしながらクエストを達成していく。

お金はそれなりにもらえて、いい小遣い稼ぎにもなり、ゲームのキャラクターは経験値を積み強くなる。

新しい武器も、魔法も、スキルなんかも手に入れて、なんと摩訶不思議なものだろう。

しかし、現実には魔法なんてものは存在しない。

魔剣も、強い装備なんてものも、ただの剣や防弾チョッキやらしかない。

魔物なんてものもでないし、錬金術とかもない。

ないものだらけのこの世界。

その部屋に殺伐とした空気に佇むのは1人だけだった。

窓硝子は割れ、家具は倒れ、飛び散るのは赤黒い液体と小さな肉片。一歩動けばべちゃりと柔らかい物を踏みつぶす音がした。

切れかけのライトに照らされ、ちかちかとそれらを照らす。靴についた液体を振り払うこともせず、倒れている“モノ”に近づき鼻をつまんでしゃがみこんだ。

鉄の臭いをさせるそれを仰向けにし、指でつまんで胸ポケットの部分をつつく。

とんとん、とん、こつつ……

硬い音がしたポケットに指をつっこみ、中身を取り出す。

目的の物を見つけ、安堵した時だった。

自分の尻ポケットで微かな振動を感じる。

普段かなり小さな振動にしており、時々鳴っているかどうかわからないくらいのものだ。

携帯電話はずっと振動し、メールではないことを示している。

思わず手に取った後、自分の手が汚れているのに気づき、新しい携帯を買わなければならないことを思った。

画面を開き、着信を見ると思わずため息をつきたくなるほどの相手で……

ずっと途切れることなく振動し続ける携帯電話の通話ボタンを仕方なく押す。

「もしもし、何？」

電話の向こうでは聞きなれた母親の声が漏れるほど聞こえてくる。

元気？どうしてるの？今度はどこにいるの？などと掛かってくるときはいつも同じ内容だが、今回の内容は違うらしい。

未成年の自分を国外に1人でよこしたのは母親である彼女だと言うのに帰って来いとの催促だった。

我慢していたため息をつき、立ちあがる。

ぴちゃぴちゃと音をさせ、幾重にも倒れているモノ……死体を跨ぎながら扉を開ける。

そこは洗面所で、持っていた携帯をスピーカーにして置いた。

『それでね……聞してる？』

「聞してる」

旧式の蛇口をひねり、冷たい水で手についた血を洗い流す。

排水溝にまるで渦のように吸い込まれていった。

「学校に行け、だろ？」

近くにあった石鹼を手に取り泡立てる。

『そうそう、あなたがそのお仕事が好きっていうのはわかるけど、お母さんはちよつとでもいいから普通の学校生活をしてほしいの。』

「仕事じゃなくて、バイトみたいな感じだよ」

呆れながら答えるが、母は同じよ、と言う。

普通の学校生活……それは本当に普通の人間が送る一生の時間の中  
の一部。

そんなものとは縁遠いと悟った時から自分の普通は一変したことを  
思い出し、笑った。

「中学も行っていないのかよ」

『だからよ……もうすぐ入学試験があるの、それまでに帰ってきて  
ちょうだい』

急な話に蛇口をひねろうとした手が滑った。

「入試?!」と驚くと、「そうよ」と即答される。

今更学校に行かなくても、知識はすでに十分すぎるほど詰まってい  
る。

有名な海外の某大学にも余裕で合格できるくらいには自分は優秀な  
つもりだ。

それを言えば、「学校はそれだけではないのよ」なんて反論してく

るのが決まっているから言わないが。

「別に帰ってもいいけど、バイトは止めないよ？」

『ほんとに？』

「ほんとほんと」

水に濡れた手を振り、かかっていたタオルで拭う。

ついでに汚れた携帯電話も一緒に服が、完全には汚れは落ちなかった。

『じゃあいつ？いつ帰ってこれる？』

嬉しそうな母親の声に遅くなるなどと言えるはずもなく。

「すぐ帰る」

と、答えた。

スピーカーをオフにして耳元に再び当てる。

その答えに満足したのか、喜んで飛行機が着く時間を教えてねだの、ごちそうを作るだのと早口で話し始めた。

はいはいと流して聞きながら洗面所を出ると、携帯電話にピピッと音が入った。

「ごめん、キャッチだ」

『あら、長電話しちゃってごめんなさい。』

「いいよ、母さんなら」

社交辞令のように受け流せば、別れの流れになっていく。

汚れた上着を脱ぎ棄て、クローゼットにあったスーツを拝借する。  
大きめのそれは袖が余ったが、腕まくりでごまかした。

それじゃあ、と母が電話を切ろうとすると、「あ」と何かを思い出したように制止の声上がる。

『そういえば、風芽<sup>かざめ</sup>。あなた、今どこにいるの?』

「今?」

窓際に近づき、閉めていたカーテンを指で少しずらす。

「イタリアだよ」



ホテルに戻って着替えを済まし、新しい携帯を買う。

今度は防水の物を選んだため、水で洗えそうだ。

イタリアの町を歩き、一つの建物に入る。そこはレンガ造りでかなり大きな物で、看板には『G i l d a』と書かれている。

扉を開ければそこについたベルがカランカランと音を立てた。中はランプがついている明るい空間で、設置されているカウンターやテーブルには老若男女、年齢様々な人たちが談笑していた。

目当ての人物はバーのカウンターに入り、男と相手をしていた。まっすぐとそこに向かい、目の前の椅子に座ると、その人物は笑って水を差し出す。

「お疲れ」

周りで発せられる流暢なイタリア語の中では異様な日本語で話しかけられる。

自分よりも年上の彼は昔日本に滞在していたことがあったが、こちらに異動となったことで久しぶりの日本語らしかった。

水を受け取る代わりに小さな封筒をカウンターに置いた。

「これ、依頼品」

「はい、確認しました」

それを開けもせずに受け取り、奥にあったボックスにしまった。

「見なくていいのか？」

「君が失敗するはずないから。また、よろしく頼むよ」

水滴の付いたコップを傾け、のどを潤す。

そういえば食事もまだだったことに気づいたが、腹は減っていなかったため頭の中から消した。

隣で飲んでいた男はいつの間にか消え、他のテーブルに移動していた。

興味もない為特に何も思わなかったが、室内を見渡す。

「ここも賑やかになってきたよね」

洗ったコップを拭きながら、にこやかな表情を浮かべる。

「風芽くんが来てから僕も楽しいし」

そう言う彼に水を飲んでいた手を下ろすと、コップの中で氷がカラッと音を立てた。

初めてここに来てから“友達”と言える程度になったと思っている。だからか、先ほどの母親との会話を思い出すと日本に帰るとは言いづらかった。

何も話さないでいるのに何かを感じたのか、「何かあった？」と聞かれる。

「明日、日本に帰る」

「は……え、そ、そうなの？」

眼を見開いてカウンターに身を乗り出す。

バツと勢いよく着たはいいが、至近距離はきつい。

「ち、近い」

手を間に挟み、そう言えばすぐに離れてくれた。

「それにしても、急だねえ」

「本当にな」

母親からの電話の内容を放せば、笑って理解し、餞別と言ってブレンドティーを出された。

「日本にも支部はあるらしいし、仕事は続けられるね」

「日本じゃ質が落ちるって聞いたから、どんなになるかわからねえな」

「場所によってそれぞれだもんね」

彼は苦笑を浮かべながら何かを書類に書いているが、こちらからは見えない為、気にせずに会話を続ける。

「まあ、今日みたいな依頼はなくなるし、君みたいな腕の持ち主には物足りないだろうね」

実家でゆっくりするのも、良いんじゃないか、と言われ目の前に何

かを差し出される。

「何これ」と聞くと「餞別その2」と答えた。  
渡された2枚の紙は日本語が並んでいる。

「君のライセンスの有効国に日本は入っていないからさ、推薦書と申請書。日本支部でライセンスの更新をすれば試験もパスで追加登録されるからすぐにお仕事できるよ」

「G r a z i e ……また会いに来る」

「お母さんによろしく」

ホテルをチャックアウトして少ない荷物を持ってタクシーを拾う。  
空港まで、と運転手に言い、携帯を取り出した。

“母親”と登録された番号を探し、通話ボタンを押す。。

「ああ、母さん？うん、明後日の朝到着の便で帰るから。迎え？いいよ」

窓の外を眺めながら電話の向こうの人物の声に耳を傾ける。  
昨日貰った書類を広げ、必要事項にサインをする。

登録番号を確認し、誤字がないことがわかると書類をしまおうと封筒に入れた。

「金もあるし、タクシーか新幹線で……は？その日に入試？！」

思わず書類を取り落としそうになった。

どうやら日にちを勘違いしていたようで、明後日の午後から入試が始まるらしい。

どんな勘違いをすれば間違えるんだ。

「（母さんのポケポケにも困ったもんだ）まっすぐそっちに向かうから入試の書類だけ持って会場に来てよ」

母は何度も謝り、了承した。

泣きそうな声は本当に気が付いていなかったらしかった。

「もういいって……ああ、うん。お土産も買っていくから……うん、うん、じゃあ」

携帯をしまい、代わりに懷から1枚の黒いカードを取り出した。

「日本、か」

カードに唯一書かれていない国。

自分の母国……

「少しは変わった、かな？」

裏返したカードには自分の名前が刻まれていた。

志方 風芽 (K a z a m e S h i h o u)

国籍..日本

ギルド協会公認免許証

資格..銃火器所持使用許可

車類全種免許

特殊薬品調合許可

特別規定内殺傷許可

S S / S / A / B / C / D / E / F 依頼受領資格

R A N K .. S S

この世界に魔法はない。

魔物もなんてものも存在しない。

しかし、一つだけ存在するものがある……それがギルドである。

## 02 出会いは突然に

チラ、チラ

『次は、中央学園前―中央学園前……―』

バスに揺られながら、日本に着いてすぐに買った小説を片手に吊革につかまっていた。

土産の入った袋と着替えの入った小さめの鞆を脇に固定した。

フライトは長く、やっと日本に着いたと思ったらすぐにタクシーを拾おうとしたがなかなかつかまらず、新幹線と電車を乗り継いで試験会場行きのバスに乗り込んだ。

周りは制服だらけで、1人だけ多荷物に私服はかなり目立っているらしい。



チラチラ

先ほどからかなり見られている。  
視線を向けるとなぜか逸らされ、こそこそと何かを話し始める。

「（日本ってこんなとこだったっけ）」

志方風芽は5年ぶりに日本に帰国した。  
外国暮らしが長かったせいか、久しぶりの日本はかなり新鮮だった。  
周りが黒髪だらけというのも同じで、自分と同じ黒がたくさんいる  
と少し変な感じだ。

しかし、一つだけ日本人らしくないのは瞳の色だった。

先祖帰りといわれるそれは、風芽の瞳を孔雀色……ピーコックブルーに染めていた。

それ以外は生粋の日本人らしいと思っているが、他者から見ればその妙に整った容姿は人目を惹いていた。

そんなことにも気付かないことを彼の友人は鈍感という言葉で片付けようとするが、本人が否定。

今でも好奇心で見られていると思っているのだった。

「（そういや、日本支部の場所きいてなかった）」

小説のページをめくり、思います。

ふと窓の外を見ようと小説から目を放すと目の前に座っていた女の子が風芽を見ていた。

長い黒髪をツインテールにして和風の控えめな雰囲気を出している。  
これが大和撫子か、と彼女の眼をじっと見ながら考えた。

その状態が続き、しばらく経つと彼女の顔がだんだんと赤く染まり、ボンッと爆発した。

茹でダコのように真っ赤になった彼女は視線を逸らし顔を俯かせる。

窓の外を見て、再び彼女を見ると、また目が合った。

「こんにちは」

「こ、こんにちは」

何も言わないのもあれなので取り合えず挨拶をしてみると、戸惑いがちに彼女からも返ってきた。

その時、バスが停留所に停まり、風芽は小説を閉じて鞆にしまった。立っている人から降りていったため、彼女よりも先に降り、周りを見た。

バス停の目の前が直接校門の前で、かなり大きな敷地であることがわかる。

『九十九中央学園』と書かれたそこは風芽が受ける学校だ。

中学を出ていないまま外国にいた風芽はもうすでに16歳だが、高校1年として入学試験を受ける。

ようするに周りは皆年下だ。

じろじろと見られるのもそのせいだろう。

とにかく母を探すため、校門を見ると、車が一台止まり、そこから一人の女性が出てきた。

彼女はキョロキョロとした後、こちらを見て手を振る。

風芽も手を振り返し、荷物を持って歩み寄った。

「久しぶり、母さん」

「おかえりなさい、大きくなったわねえ」

別れた時よりも視線を下にしなければ目が合わない母を見下ろす。  
嬉しそうにそう言う母は変わらず若造りで、セーラー服でも似合い  
そうだ。

「あ、そうそう。これ、受験用の書類ね、これが受験票、あとあと  
……」

「はいはい、わかったから」

落ち着きなく書類をばらばらと出そうとしている手を止めさせ、受  
け取る代わりに土産の入った袋を渡した。  
軽く重さがあるが、母でも持てる重さだ。

「生ものは無理だから服とかハンカチね。あとはワインとかも買っ  
ただけど、届けてもらうことにしたから」

「まあまあ！ありがとうございます！」

車の後部座席に土産と鞆をしまい、手荷物を書類とそれが入る鞆の  
みにした。

母は嬉しそうに扉を閉め、運転席に乗りこんだ。  
窓を下げ、中から顔を出した。

「あとね、覚えてる？近所に住んでた透とおるちゃん。この学園に通ってるのよ」

「あー……そんなのもいたっけ」

はつきり言って覚えていない。

日本での思い出はあまりいい物はなかったような気がする。

ギルドで依頼を受けることになってからそっちにかかりつきりだった。

透なんて名前も覚えていないし、自分の小さい頃の記憶もさっぱりだ。

「酷いわ、風芽！ちゃんと会ったら挨拶するのよ？」

「会ったらな」

ざわざわと受験生が校門の中に入っていく。

そろそろ受付が始まるらしく、どんどんバスが停留所に集まってくる。

「そろそろ行くよ」

「うん、がんばってね」

窓が閉じ、車が遠ざかっていった。

軽くなった身で書類を片手に門をくぐる。

受験生らしき学生たちの波に乗りながら渡された受験用の書類を見た。

この学園はそれぞれ学科があるらしく、かなり珍しい学校みたいだった。

「へえ、音楽科に特進科……美術科、芸能科、武術科。いろんあの  
があんだな」

書類に挟まっていたパンフレットを見た後、書類を再び見る。

「普通科」と書かれた希望学科欄は母が勝手に決めたらしい。  
実際、どこでもかまわないと思っていた風芽は専門的な学科でない  
ことを少し喜んだ。

「部活も結構種類あるな……射撃部かあ、おもしろそう」

「あの」

声をかけられ、振り向くとさっきバスの中で目が合ったツインテールの大和撫子がいた。

中学の学生袍らしきものを抱え、自分と同じ書類封筒を持っている。

「さっきの……」

「古野枝 咲さきと申します」

そう名乗り、綺麗なお辞儀をした咲。

「俺は志方風芽」

お辞儀をした彼女と違い、手を差し出す。

咲は手と風芽の顔を見比べ、ハッとしたように両手で差し出された

手を包んだ。

「あの、握手のつもりだったんだけど」

「え？………はっ!!」

すみません!と手を放し、自分の頬に手を当てて後ろを向いてしまった。

放された手をどうしていいかわからず、とりあえずその手で風芽は自分の頬を搔く。

「俺のことは風芽でいいよ」

「私も、咲とお呼びください!」

「あ、ああ」

日本の女性は淑やかじゃないのか？

かなり積極的な言葉に、たじたじになるが、ここはイタリアからの帰国子女。

紳士的に接しなければ。

「これも何かの縁だし、一緒に会場行かないか？」

「はい!ぜひ一緒にさせてください!」

風芽より低い頭が隣に並び、一緒に歩き始める。

他の受験生は周りは皆ライバル、とでも教えられたのであろうか、緊張した空気が漂っている。

風芽も咲も受かる可能性は100%というわけではないが、緊張は

ない。

歩きながら紹介も兼ねて会話をしていた。

「へえ、じゃあ咲は芸能科受けるんだ？」

鈍い風芽でも咲は美形の部類に入るとわかっていたが、芸能科を狙っているとは知らなかった。

実家は有名な御家柄らしく、歌手なんてチャラチャラした物は反対されたりしい。

それでもなんとか説得して、この学園を受ければ自由にしても良いと条件をだされたのだ。

「はい、合格率はかなり低いらしいのですが、歌が好きなので。風芽さんは？」

「俺は普通科」

そう答えると、眼を丸くした。

「そうなんですか？」

「意外？」

「いえ、その……風芽さんなら芸能科でも、えと……」

ごによごによと口籠る咲。

よく聞こえなかったが、風芽が普通科だということが意外だったらしい。

普通科に希望したのは風芽ではなく、母親だったため、なんと言わ

れても気にはしなかった。

「俺はとにかく卒業できればいいんだ」

「え？」

「もともと、学校とか通う気なかったし、日本に帰国の予定もなかったから」

そう言うのと受付の列が見え、受付の教員に書類を手渡す。

横で咲もそうしていて、受験表の確認と受験の教室の場所が書かれた紙を渡される。

地図で場所を確認した後、受付を済ませた咲が追い付いてきた。

「あの、教室は……」

「学科別だから別々」

場所を確認せずにきたのか、えっと驚き、紙を見る。

大和撫子ががっくりと肩を落とす姿はなんともいえない。

「咲なら受かるよ。試験頑張って」

「……」

バツと顔を上げ、なぜか目がうるんでいる咲は「はい、ご期待にこたえてみせます！」と張り切った声で言った後、ダッシュで教室に向かって行った。

「は、走ってどうする……」



すでに見えなくなった小さな背中を見送り、手にしていた地図を見た。

教室は2階にあるらしい。

「階段か」

受験生の流れは止まってはおらず、それにそって歩いて行く。

その途中でもチラチラと見られ続けていた。

咲と歩いていた時もかなり見られていたが。

「2-A、2-A……つと、ここか」

教室にはほとんど受験生が座っており、そのすべてが学生服を着ている。

唯一私服姿でいる風芽はかなり目立ち、黒板に張られている番号の席に座っても、じろじろと視線は来る。

参考書を見て悪あがきをしている学生もいるらしいが、気が散っているように見える。

「（なんか、俺、場違いだな……）」

黒い学生服を身にまとっている生徒たちの中でジーンパンにパーカーといったラフな格好でいる風芽。

この服以外はすべて受験会場には合わない服だったので、これしか着るものがなかったというのものもある。

鞆から筆記用具を取り出し、もちろん参考書など持っているはずもなく……小説の続きを読むことにした。

試験が始まるにはまだ30分も時間がある。

「（そう言えば、咲は芸能料を受けるって言ってたな……芸能料って何するところだろ）」

パラ見したパンフレットを再び開くのも面倒だったので、あとで咲に尋ねよう。

「あ」

咲と連絡手段がない。



### 03 帰郷

長い試験が終わり、緊張で強張っていた受験生の表情も解放されたそれになっていた。

入学試験に面接は付きものだと思っていたが、この学校で面接はなく、全て書類と学力試験で審査されることになっていた。

受験生が多く、捌ききれないと言うこともあるせいか、一般の試験は面接はなく、逆に推薦の試験のみ面接が行われる……と、後から見た書類に記載されていた。

試験終了と同時に受験生が退室していく中、風芽は鞆から携帯電話と取り出した。

電源が切られたそれに明かりをつける。

画面は購入時の初期設定のままの画面で飾り気のないものだ。

使えればいい、とデザインにもこだわっていない為、店で使いやすい機種を進めてもらい即買いし、着信音なんて設定せず、常にマナーモードである。

画面にデジタルの時刻が表示され、ここから家までの時間を計算する。

今の時間ではバスも混雑し、列をなしていることだろう。

外は陽が伸びまだ明るい。

駅までそう長くもないし、散歩がてら歩いて行くのも悪くはない。

とりあえず教室を後にし、階段を降りる。

開始前とは違い、かなりバラバラとしていた。  
皆どこかぼわんと緊張感が抜けた顔をしていて、笑いそうになる。  
彼らを観察しながら校舎から出て、学生が並ぶバス停を横切り、道  
沿いに歩いていった。

並木道が続く道には桜が咲き、時折バスが自分を追い抜いていく。  
久しぶりに見る桃色の花びらに、日本に帰ってきた、という実感が  
湧いてくる。

日本に帰ってきてやりたいことは特にならない。  
母親に頼まれた他理由はなく、自分の生まれた国だと言う事だけ。  
嫌いというわけでもなく、好きというわけでもなく……

志方風芽には執着という言葉がないらしい。

そんな自分を特別だと思ったことはない。  
学校に通うことが普通だと言われても自分には合わないとわかって  
いた。

小学校にかろうじて通っていたが、同じことをする毎日に違和感を  
覚えギルドに興味を持ってからは通うことはなくなった。  
父はおらず唯一の肉親である母は何も言わず、自由にしろと言った。  
親不孝者だと誰かに言われた気がするが、それさえも他人事のように  
聞こえた。

しかし、少しでも何かを変えようと、日本を離れてからはそれにつ  
いて考え、母の言うことはなるべく聞こうと決めた。  
親孝行というやつだ。

落ちてきた花びらが前髪につく。

それを払うことなく、ぼーっと歩いていると並木道の横に公園があるのを見つけ、すぐそばから女の子の声が聞こえた。

焦るような、必死な声が少し気になり入口を通ると、先ほど試験を受けた学校の校章が付いている制服を着た少女が木の近くで腕の上に伸ばし、何かに向かって声をかけている。

彼女の足もとには鞆らしきものと中身が散乱している。

「おいで、おいで。」と言い、何がいるのか見てみると木の枝に猫が乗っていた。

枝に掴まったまま身動きしない猫は、降りれないのか一向にその声にこたえようとしない。

背伸びしたり、ジャンプしたりと手を尽くしているが、進展はなさそうだ。

風芽は頬を掻き、少女の背後に立った。

「あれ、君の猫？」

「うぎゃっ！」

奇声を発して振り向いた彼女の肩より少し長めのポニーテールが風芽の鼻を掠る。

くすぐったい感触がきたが、顔に出すことはない。

「ごめん、驚かせたか？」

「え？ いや、あっはは」

かなり驚いたらしく、眼をキョロキョロさせて笑う女の子は風芽の

顔を見て動揺した後、「私のじゃないよ」と否定した。

「なんていうか、その、迷子の猫探しを頼まれてーみたいなの？」

「へえ、偉いな」

「いやあ、これも仕事だし」

にへらと笑い、体をくねらせて照れる。

顔は可愛いのに行動はなんだか変だ……ん？

「仕事？」

「はっ！ち、ちがつえつと……」

手で口をふさぎ、「ぎゃーどうしよう！」と1人で混乱し始める。

ポニーテールを馬の尻尾のようにバサバサと振りまわし、風芽に背を向けしゃがみ込んだ。

ひたすら「どうしよう、どうしよう」と呟いている。

風芽は彼女をそのままに、木を見上げた。

白く綺麗な毛は飼猫の印だ。

先ほど“仕事”という単語と彼女の動揺っぷりにああ、そうかと1人納得する。

じっとこちらを見てくる猫の目を見返し、視線を逸らさない。

そっと真下に近づき、軽く手を腹の高さまであげると猫が耳をぴくっと動かした。

その視線は逸らすことなく、こちらを見ている。

「いい」

猫は風芽が発した言葉に瞬きをし、刷毛のような尻尾を揺らした後、「にー」と一鳴きして身軽な動きであげられた手の上に降りてきた。見た目通りに毛はふわふわとしていたが、所々に汚れが目立つ。風芽の胸に落ち着いた猫はのんきに欠伸をしていた。

「ほら」

しゃがみ込んだままの少女の方を向き、猫を抱えたまま話しかける。「なに?!」と勢いよくこちらを振りむいた少女の顔の前に猫をつきだす。

「へ?」

急に目の前に現れた猫のアップに目を丸くし、「ほら」とさらに近づけられ、猫の脇を反射的に持って抱きしめた。ぽかんとしたまま猫と風芽を見比べる。

「あ……」

「仕事は早く終わらせないと、な」

肩にかけてあったが、猫を渡した時に下がった鞆をなおし、手をパンと払う。

彼女もその音で正気に戻ったのかバツと立ち上がり、猫を完全ホルドする。

その時、猫が苦しそうな声を出したのを本人は気づいていないだろう。

「あ、ありがと!」



「いや、こっちも聞きたいことがあるんだけど」

「え？なに？！なんだい？！何でも聞いてちょうだいな！」

「（テ、テンション高いな。）君、ギルドに入ってるだろ？」

「……………なんで?!」

異常なほど驚愕し、猫をさらに締め上げる少女。

「あのカード」

先ほどから彼女の足もとに散らばっている鞆の中身を指さす。

彼女の名前と共に、『ギルド協会公認免許証』と書かれた黄色いカードが定期入れからはみ出していた。

「ふんぎゃああああ!! みちゃらめええええ!!」

猫を片手で抱きしめ直し、カードを拾う。

「こ、これは! その! クレジットカードだよ!」

「いや、俺も持ってるから。ここから近い日本支部の場所知りたんだ」

たしかにギルドのカード、通称『ライセンス』と呼ばれるものはクレジット機能も付いている。

ライセンスはきちんとギルドの登録試験を合格しなければ手に入らない。

身分証明の代わりにもなり、さまざまな情報が詰まっているのだ。簡単に手に入れることはできないこのカードはランクで色が違い、黄色のカードは新規者、Fランクを示している。

風芽が持つ黒は最高ランクのものであり、所有している人間は極少数だ。

定期入れに入れているのもどうかと思うが。

「じゃ、じゃあ、君もライセンスサー？」

ライセンスサーとはその名の通り、ギルドのライセンスを持っている人間をさす。

自分のカードを制服のポケットにしまい、猫を抱く腕を緩めた。

「まだ有効国に日本が入ってないから、この国じゃまだノーライセンス扱いかな」

「うわー！まだってことは外国から来たの？どこ？アメリカ？」

「イタリア。アメリカにもいた」

同じライセンスサーに会って嬉しいのか、猫のことを忘れて質問攻めの雰囲気になってきた。

このまま話続けるのは時間的に母を待たせることになる為、それだけは回避すべく、先手を打つ。

「ライセンスの更新したいんだけど、場所わかんなくて」

「おおお！いいよ、いいよ！なんでもききなさい！私は先輩だからね！」

ちなみに、黒のカードを持つ風芽と黄色のカードの少女では風芽の方が上であり、依頼もかなりの数をこなさなければならぬ。

経験でいえば風芽の方が先輩なのだが、カードを見せられていない少女は右も左も知らない初心者だと思っているらしい。

勘違いをさせたまま、風芽は少女に礼を言う。

「結構ここから近いんだよーっと、この地図あげる」

定期入れを拾い上げ、そこから一枚の紙を取り出した。使い古されているその紙を広げると、たしかに地図で、わかりやすいように建物の名前がぎっしり書かれている。

「それ、私が道覚えられなかったときにいつも使ってたんだ！もう覚えたから使っていないし、あげる！」

猫のお礼、と言い笑う。

紙をじっと見て配置と経路を覚える。

そして紙をたたみ、少女に渡す。

「え、いいの？」

「覚えた。わかりやすいけど、もらえない」

「ふーん……記憶力いいのね」

定期入れに入れ直し、散乱した鞆を拾い上げる。その間も猫は大人しく抱かれている。

「そだ、私、水留<sup>つづみ</sup> 祈<sup>いのり</sup>。九十九中央学園の1年生……っと、もう2年生か。ちなみにギルド歴1年！」

「俺は志方風芽。今日、九十九中央の入試だったんだ」

「じゃあじゃあ、後輩君になるのかな？」

「合格してたらだけど」

猫を抱えたまま器用に鞆を持った祈は、九十九中央学園の普通科に入っているらしい。

聞くと、バイトを許可されているのは普通科だけで、他の特殊クラスは一切バイトを禁止されているという。

母の選択は正しかったと、後で母を褒めるのはまた別の話だ。

「それじゃ、俺はこれで失礼します」

「一緒に支部、行かないの？」

「今日は先約があるんで」

「わかった！でも、敬語はいらないよ！祈って呼び捨てにしてね？ほら、猫ちゃーん。ご主人たまのど帰りまちよーねー」

猫が捕まり無事依頼完了ということで機嫌よく公園を出ていく。入り口近くに来ると、祈は振り向いた。

「じゃーねー！風芽君！」

そう言ってスキップをしながら去っていった。  
風芽も軽く手を振り見送る。

「1年でまだFランク、ね」

気づくと周りもだんだんと暗くなってきた、マナーモードの振動の音が聞こえた。

なり續いていた携帯をとり、ボタンを押す。

「はい」

『風芽？今どこ？御夕飯できたんだけど……』

「歩いてたからまだ電車乗ってないんだ。もうすぐで駅だけど先に食べてもいいよ」

『ええー、帰ってくるまで待ってるわよ。久しぶりに風芽とご飯食べられるんだもの』

「わかった。早歩きで帰る」

意外に時間が経つのは早かった。

電話を切った後すぐに公園を出て駅に向かい、帰宅ラッシュの電車に乗った。

ホームで電車を待っている間もなんだか視線を感じたが、殺意のあるものではなかったので無視する。

移り変わる景色を見ながら、自分の家が近付くを感じる。

久しぶりに見る懐かしい景色に自分にもこんなことを感じる心がま

だあったのかと自嘲気味に笑った。

「（明日は何もないし、ギルドに行くか……更新しないと、銃も持ち歩けないしな）」

風芽の持つライセンスの資格には銃を使用所持できる特殊な資格がある。

ギルドは全世界に認められている機関であり、規則も多く存在するが、特殊な権利や資格を得ることができるのだ。

武器を常に携帯していることが日常だった風芽にとって、現在、ライセンス有効国外である日本では銃を携帯できず、その他の資格も活用できないことは不自由極まりなかった。

なにかあった時に、ライセンスは役に立つ。

そのためには更新をしなければ……幸い、偶然にも日本支部の人間に場所を教えてもらったことで、時間短縮をできた。

電車の扉が開き、「おります」と告げながら息苦しい中から脱出した。

実家のある駅は小さなもので、線路は二本のみだった。

エスカレーターもエレベーターも付いておらず、近々工事予定と書かれた看板だけが置かれている。

駅の外は何一つ変わっていない。

身体に染みついた記憶を頼りに自分の家を目指す。

歩いていて知り合いに会っても、きつとわからずに無視をするだろう。

それほど風芽にとって、幼いころの記憶はどうでもいいものなのだ。

覚えているのは歩いた道だけ。

あとほうるさく吠える犬やいつも挨拶をしてきたお婆さん。

どちらも年だったためかもういないだろう。

それでも風景は小さいころに見たもので……

「（変わらないな）」

覚えている道を母を待たせていることを忘れて似合わぬ感傷に浸りながら歩く。

家の前に『志方』と書かれた標識を見つけた。

そつと指で名前をなぞり、門を開ける。

明かりのついている一階の部屋を慌ただしく歩く母の影。

玄関の明かりも点いている。

ドアノブを握り、開いた。

「ただいま」





## 04 立場

ギルドは多くの依頼が集まる、いわば何でも屋のような機関だ。金を払えば、どんな内容の依頼でも受ける人間がいれば受領される。そんな場所に入出入りする人間はそれぞれ事情を抱えた人間や、金を必要としている人間。

しかし、最も多いのは“特別”な力を“持ってしまった”人間だ。

一言で言えば、『超能力』。

人間が持ちえない特殊な能力を生まれた時から持っている人間……最初に発見された地は日本であり、超能力を持つ人間その力を制御しきれず、全てを壊しまくり、人をも殺めてしまった。

大量殺人が起きてしまったその事件をきっかけに『その能力は災いをもたらすもの』とされ災いのもと、『S A I』と呼ばれるようになった。

S A Iの能力者は年々増え続け、今では人類の進化だと言う人間もいるが、その力のために虐げられる人間がいるのも事実。

そこで、彼等に特殊な居場所を与えることでその能力を活かすことを決めた。

それがギルド。

機関に所属する人間はS A I能力者が多い。

もちろん、普通の無能力者もいるが、活躍しているのは能力者であり、より強い能力を持つ人間は尊敬され、羨望される。

それでいて、ギルドに存在するRANKはその者の地位を表し、それが高いほど重要なポジションについているとも言っている。

規則を破れば制裁がある。

その制裁は強い者が執行しなければならない。

しかし、それは能力者の頂点に立つということであり、実際に存在することはなかった。

『能力者殺し』と呼ばれる存在が現れるまでは。

-----

「はい、次の方」

カウンター内に座る女性の横に番号が表示される。

「ライセンスの更新を」

パソコンを操作しながら器用な手つきで作業を行う女性の前に書類が差し出される。

受取り内容を読むと、初めてそこで相手の顔を見た。

相手はまだ学生くらいの年齢に見える整った容姿の少年で、初めて見る顔だった。

書類には『ギルド免許証更新願』と『免許有効国登録推薦書』と書かれている。

「ではライセンスを拝見いたします」

ポケットから取り出したカードを渡され、女性は目を見開き少年とカードを交互に見る。

この仕事に就いてから初めて見る最高ランクの“黒”ライセンスカード。

どうかしました、と言われ慌ててカードの認証を行う。

コンピューターに表示されたデータには『unknown』と表示されている部分が多い。

ハイランカーの人間にはよくある秘密保持の上級権利だ。

低いランクの人間にはないが、ランクが上がるごとに与えられる特権は多くなる。

「で、では日本を有効国としライセンスの更新を行いますので少々お待ちください」

カタカタとキーボードをたたき、ライセンスの更新手続きを行う。その間も少年はその場にいるが、視線は室内を見渡している。

「この支部は初めて……ですよね？」

作業を行いながら女性が話しかけると、「はい」と返事が返ってくる。

ライセンスには日本以外の国が多く有効国として登録されているため、今まで外国で依頼を受けてきたのだろう。

国籍は日本なのに、肝心の日本の登録がされていなかったことは珍しい。

少年は周りを見て物珍しそうな表情をしていた。

「何かわからないことでも？」

「いや……更新してすぐ受けられる依頼が欲しいんだけど」

更新後に依頼を受けるときは試験的な依頼を受け、更新の最終確認的なことを行う。

日本でもそうだと思っていたが、女性は笑ってそれを否定した。

「日本では更新後に通常依頼を受けることができます」

「そうなの？」

「はい。あちらの機械にライセンスカードを入れて、受ける依頼を選択し、こちらの受付にお持ちくだされば受領になります」

女性が指している機械はタッチパネルとなっており、操作している人間も数人いる。

まるで銀行のATMを操作しているような手つきだ。

それを見ている間に更新手続きが終わり、カードが機械からピピッと音をさせ出してくる。

書類に判を押し、ライセンスを少年に渡す。

「では、志方風芽様、更新手続きが終了しました」

「ありがとう」

微笑んだ風芽に女性は頬を染める。

ライセンスカードをポケットにしまうとすぐにカウンターを後にす

る背中に、女性は事務的なセリフを忘れ、呟いた。

「この支部でよかった……」

一通りの依頼を見るが、SSランクの依頼はそうあるものではなかった。

一番高いものでAランクだが、内容はそう高度なものではない。

「手短かなものでいいか……」

風芽はギルドの仕事をバイトと称している。

仕事というほど重い存在にはしたくはないからだが、彼にとっては何よりも大事なものである。

“生きる価値”というものを生み出せる場所だと言っても過言ではない。

それほど重いものを、“仕事”や“使命”という重たい言葉で飾りたくないのだ。

だから、見かけだけでも軽くしたかった。

母を安心させるためでもある。

仕事はきちんとかこなすが、風芽は仕事を選ぶ人間だ。

Aランクの中でも身体を動かせそうなものを選ぶとするが、なかなかそういったものは見当たらない。

どれもこれも自分のやってきたものとは異なり、選択肢がかなり限られていた。

今まで手当たり次第に依頼を受けていたわけでもなく、自分の能力を発揮できるものを選んできた。

「んー……犯罪組織の殲滅とかないのかな」

そう呟いた風芽に横で機械を操作していた人間はバツと振り向き、彼を凝視していた。

物騒なことを言う彼を見たこともなく、誰だ、と噂しているが、ギルドの個人情報完璧に守られているため、簡単に知ることはできない。

知るには話しかけるしかないが、誰もが今の言葉でその気がなくなっていた。

「これで腕試しかな」

一番上に表示されていた依頼を選択し、カードを取り出す。

データはカードに入力されているのか、すぐにカウンターで受領は終わった。

受けた依頼はAランクの中でも高いレベルの物で、護衛の依頼で報酬もかなり設定が高く自分としては手ごろなものだ。

ちなみに場所も近い。

受領の知らせは依頼主に直接連絡がいき、今から来てくれとのことだった。

準備は何もせずとその身のままで行くことにした。

日本に帰国する際、所有していた武器は全て知り合いに預け、後々裏から届けてもらうことになっている。

飛行機内に持ち込もうにも、日本はまだ有効国ではなかったため、出発の時はいいが、到着してからは許可が下りない。

かろうじて改造銃が2丁とナイフが数本あっただけで、それも持ってきてはいない。

護衛といってもただ武器を装備していればいいというものでもないし、この身一つでどうとでもなるだろう。

「問題はこれだな……」

案内されたのは広い接待室で、座った瞬間に軽く沈む感じが妙にむ

ずがゆかった。

メイドのような服を着た女性が紅茶を淹れ、礼を言うとお辞儀をして部屋を出ていった。

「なんか、場違いな……」

風芽は気慣れない服の襟首を軽くひいた。

今着ているのは先ほど着ていたズボンにパーカーといったラフなものではなく、白いYシャツに黒スーツ、黒ネクタイだ。

条件に書かれていたのは、「スーツ着用」と一言であり、どんなとまで書かれていなかったためかなり迷った。

護衛、ならば黒スーツだろうと偏見をもった考えの風芽は、この格好しか思いつかなかった。

たまに依頼で着ることがあるが、その場で着捨てるためこのスーツは新調したものだ。（その他にも、その時着ていた服は血痕が残ってしまったり、切れて着れなくなったりするため捨ててしまうことが多い）

まだ伸び続けている身長のせいで、ぴったりだと思っていたサイズは少々小さめだった。

動くには問題ないが、意識してしまうとそう感じてしまう。

カップを傾け、室内を視線だけで見渡す。

あちらこちらに監視カメラが設置されているのは防犯のためか、ずっと見られているのは少々息が詰まる。

ネクタイを締め直し、位置を整えると奥の部屋から男性が現れた。後ろに燕尾服の男を従わせている。

「お待ちせして申し訳ない」

そう言って正面に座り、燕尾服の男が紅茶を淹れる。



風芽は依頼書を内ポケットから取り出し広げ、ギルドのライセンスカードと共に提示した。

「ギルドで依頼を受領したカザ……志方風芽だ。今回、護衛依頼と  
いうことで」

敬語を一切使わずに話す風芽に燕尾服の男は顔を顰める。

依頼主らしき人物も目元をぴくりと動かした。

基本的に風芽はギルドの仕事で敬語は使わない。

ギルドの依頼主と自分はホストとVIPではない……同等の位置に  
いる共犯者の方が近いと考えている。

依頼主は報酬を払い、自分は依頼を引き受ける。

どんなことにもリスクは伴い、それを共有する関係。

同じ位置にいる者に敬語など必要はないというのが風芽の態度の理  
由だった。

「私は九条院家当主、九条院雅治。依頼は娘……冷華の護衛を頼み  
たい」

そういうスタイルなのだと思ったのか、依頼主の九条院家当主はそ  
う返した。

九条院冷華。

小さな頃から“ピアノの妖精”と謳われ、その音色は誰をも虜にす  
るといわれている。

現在、九十九中央学園高等部2年、音楽科のピアノコース所属。  
成績は優秀で定期試験は常にトップ3に入る。

すでに自分のコンサートを開く程の有名人……と資料で読んだ。

「もうすぐピアノのコンサートがあるのだが、この手紙が来たのだ」

差し出されたのは一枚の封筒で、中には切り貼りされたいかにもと  
いった脅迫状が入っていた。

『コンサートを中シしろ。さもなくば、お前はハ死ぬ』

「まあ、見たまんま脅迫状だな」

「今回のコンサートは外国からの巨匠が来る。留学するための機会  
をつくるチャンスなのだ。成功させなければいけない」

普通、脅迫状なんてものがくれば娘を守る為にコンサートを中止さ  
せるのがセオリーだが、やりたいというのならやらせる。

風芽は依頼主の行動を制限することは一切しないし、無駄な口出し  
もしない。

別に留学だろうがなんだろうと言われようと関係ない。

「そんなことはどうでもいい。期間はコンサート終了まで。内容は  
九条院冷華の護衛、で確認はいいか？」

「あ、ああ」

「で、本人は？」

部屋には九条院家当主と燕尾服の男しかいない。

本人がいないのはなぜかと問うと、現在学校でピアノの実技試験を  
行っているらしい。

もちろん厳重な護衛付きで。

「明日から休みに入るが、明日から護衛を頼みたい」

「わかった。今日はこれで失礼」

「娘を頼みます」

「やっと監視カメラから解放ー」

首を傾け、コキコキと鳴らす。

ネクタイをほどいてポケットにつっこみ、ボタンを三つほど外して  
楽にする。

大きな門を出て高い塀沿いに歩く。

「お嬢様の護衛でAランクなんて、レベルが低いな」

広い道の端を歩いていると目の前からシルバーの外国車が走ってき  
た。

すれ違い際に窓の向こうに女の子と目が合う。

たった一瞬だったが、風芽は鼻を鳴らし笑った。

「お嬢様、ね」

「どうかなさいましたか？」

「なんでもないわ」

膝に乗せた楽譜をペラリとめくる。

ふと見た窓の外にいた黒スーツの綺麗な男と目が合った気がした。  
不思議な感じがしたが、その一瞬は偶然だと思い音符に目を走らす。

「コンサート、成功すると良いですね」

「成功させるわよ」

「そうでございましたね、冷華様」



## 05 影

ピピピピピピ……

耳元で電子音が鳴る。

包った布団から腕だけを出し、手探りでベッド脇に置いたはずの物を掴む。

カチャツと音を立ててその電子音が止んだ。

枕に顔を押しあて息を吐き、握った目覚ましを見る。

「6時……」

いつも目が覚める時間だ。

外はようやく明るくなってきたくらいで、頭はすぐに覚醒した。

目覚ましを元の位置に戻し眼を擦ったあと、欠伸をしながら両腕で伸びをする。

布団の中から足を抜き、床につける形で座る。

枕の下に手を入れ、隠してあった改造銃を抜き出し寝間着代わりのジャージと腰の間にしまう。

捲くれたシャツを隠れるようにかぶせると、ベッドから立ち上がった。

カーテンを開き、窓を開ける。

「朝か」

「今日もお仕事？」

味噌汁と白米の盛られた茶碗をおき、母が尋ねる。

風芽と同じく早起きらしく、すでに朝食を作っていた母はキッチンに立っていた。

バイトに行く、と言って出掛けて帰ってきたときにはスーツを着ていた風芽に母は何も言わない。

今日もリビングに起きてきたときにはスーツを着ており、“バイト”なのだろうと聞いてきた。

いつのまにかスーツが似合うようになった息子に寂しさを覚えたことは秘密だ。

「今日から一週間くらい帰らない。まあ……家にはたまに帰ってくるよ」

「そう……学校の合格発表は郵便で来るんだったわね」

届いたら教えるから、と言って鍋に蓋をしテーブルについた。

ほくほくと湯気を出す白い米と味噌汁を口にする。

「やっぱり朝は味噌汁と白米だよな」

「むこうで何食べてたの？」

「パンとかシリアル」

「まあ」

たまにジャパニーズフードが売ってる店を見つけて寿司とか食べていたが、毎朝白米というわけにはいかなかった。

たしかに外国のご飯も美味だったが、母の作る味噌汁はもっと好きだ。

漬物もうまい。

「ジャンクフードばかり食べてたんじゃないでしょうね」

食事にはうるさいと母は自分で言っている。

小さい時から好き嫌いがないように食べさせられたりもした。

「さすがに納豆はいいよ」

さりげなく納豆を出そうとする母を制し、目玉焼きをつついた。

納豆は前から苦手なのだ。

私が食べたいの、と白米にかけて食べ始めるのを見て風芽は笑った。テレビをつけてはいるが、たまにそちらに視線を向けるだけで、あとは他愛のない話をする。

親子で積もる話もあると思っていたが、それほど会話の量もなく少しするとニュースの話題に入っていた。



最近は物騒になってきたらしく、小学生の登下校は保護者が常に付き添うようになったらしい。

「へえ」

「風芽が小学生の時はたまにやってたわよね」

「そうだっけ？」

覚えていない。

「もうっ……そう言えば透ちゃんに会った？」

いきなり話題を変えた母に風芽は首を横に振った。

そもそも顔すら覚えていないのに、そんなの無理だろう。

興味がないと言ってしまえば母はまた呆れかえるに違いない。

「透ちゃん、武術科なんですって」

たしか、武術を専門にした学科だったか……

家に帰ってからパンフレットを見直し、学科の説明を読み返した時に見た。

「なんで知ってるのさ」

だって母さん良く会うもの。

そう言って呆れた顔をした。

透という幼馴染はよく母と会っていて、風芽のことを聞いてくるらしい。

「（本人のいないところでべらべらと何を話しているのか知らないが、そんなに仲がいいのか？）」

味噌汁を飲みほし、箸を置いて手を合わせる。  
席を立てば、母が見上げてきた。

「ちゃんと連絡してね？」

「わかってる」

椅子にかけてあった上着を取り、家を出た。

「今日から専属の護衛につく志方風芽君だ」

九条院家当主にそう紹介された風芽は形式上軽く礼をした。

目の前にはピアノの前に置かれた椅子に座り、楽譜を読んでいる少女、九条院冷華がいる。

こちらを見ることなく楽譜に向かう姿はまるで人形のようなだった。

「冷華」

「お父様、私は護衛なんていりません」

そう言って初めてこちらを見る。

その目は冷めきっている。

彼女の態度に当主は風芽にすまない、と言い部屋を後にした。

「（この状態で2人きりにするとはね）」

残された風芽はピアノに向かう冷華を見た後、近くにあった椅子を窓際に置き、座った。

ネクタイを緩め、ピアノの方を向くと一瞬目が合ったがすぐ逸らされる。

先ほどと同じ、仏頂面でその美貌も台無しだ。

ポロンと音が鳴り、続けてピアノの音色が響いてきた。

窓の外を見ながらその音を聴く。

風芽は音楽に詳しくはないため、タイトルもなにもわからない。

ただその音を聴いているだけだ。

「（この部屋にはカメラがないんだな）」

資料にあった冷華の性格を考えれば、自分を監視するという行為が許せないとみた。

『ピアノの妖精』はどうやら繊細らしい。

先ほどからピアノのテンポは速く、風芽はその音から“怒り”のよ  
うな感情を感じた。

呆れてため息を小さくもらす。

ジャーンッ！！

乱暴に叩かれた鍵盤から発せられた音は防音設備の整っている部屋  
に響いた。

冷華は鍵盤に手を置いたまま立ち上がり、楽譜を睨んでいる。

「出て行って」

静かな声で呟くように言った言葉に、風芽は何も言わなかった。

その様子に鍵盤から手を放し、今度ははっきりとした声で風芽に言  
う。

「出て行って」

「何故？」

「私が出て行けと言っているのよ」

窓際に座る風芽の前に立ち、見降ろしてくる。

顔に影が落ち、冷やか容貌がさらに冷たく感じられる。

彼女の顔を見、立ちあがると風芽は頭一つ分低い冷華を逆に見降ろ  
した。

「だったらそれは君の父親に言うことだ」

彼女と向き合い壁に寄りかかる。

無表情に近い状態で睨んでくる冷華はその言葉に眉を顰めた。

「俺の依頼主は九条院雅治、君の父親だ。君はただの護衛対象にすぎない」

「雇われの分際で盾突く気？」

「どうとでも。俺が依頼されたのはコンサートまで君を護衛すること。君の命令をきけとは言われていない」

優位に立とうとする冷華にそっけなく言う。

屁理屈といわれようと、風芽は今までもこれからそれが自分のスタイルだと思っている。

自分を従わせようとする人間を始末したこともあった。

ギルドの人間にとって重要なのは、利だ。

風芽にとっての利は、依頼の成功と……

「とにかく、俺のことは空気だと思っていい。必要なこと以外はなにもしないから」

そう言って椅子に座る。

自分のペースを乱す風芽に、冷華は苛立った感情が静まっていくのを感じる。

冷華を卑下するように軽んじる言葉を言ったと思ったら、興味を失くしたようにそっけなくする。

自分のピアノを聴いて呆れたようなため息をついた男に怒りを感じたはずなのに、この男のペースに飲み込まれてしまう。

しばらくして風芽に背を向け、ピアノに向かう。

「変な奴」

「よく言われる」

楽譜をめくり、再び弾き始めた。

先ほど違って苛立ったような、憤りを感じているような感情は感じられない。

そんな冷華を見た後、眼を細め窓の方を向いた。

敷地内には警備の人間があちらこちらに配置され、防犯装置もかなりの数だ。

屋敷にいれば、まず襲われることはないだろう。

一曲が終わり、楽譜をめくる音が聞こえる。

「あなた、ギルドの人間なの？」

ピアノに向かったまま、冷華が問うた。

先ほどの声色とは違う。

「そう」

「どうして？」

「何が？」

「どうしてギルドなんかに入ってるの？」

「君に教える必要はない」

淡々とした会話。

風芽が聞かれる内容を流しているだけのそれは、冷華にとって今までになかったことだ。

自分でもなぜこんなことを訊いているのか不思議でならない。

「(どうでもいいことよ……)」

「君は、どうしてピアノを弾いているんだ？」

逆に質問が返ってきたことに驚き、ふと違う音を出してしまう。

「私は……」

ピアノの音が止んだ。

言うことはない。

こんな怪しい人に言う必要はない。

でも……

『ピアノを弾くために生まれたような子だ』

『これ以上ない天才よ』

『素晴らしい才能だ』

「私には……ピアノしかないのよ」



カタカタカタカタ……

薄暗い部屋で液晶画面の光にかじりつくように男はいた。  
眼鏡に反射してスクロールしていく文字が反射する。

カタカタカタカタ……

ぶつぶつと何かを呟きながらひたすら何かを打ち込んでいく。  
画面には数枚の写真が表示されては消え、横に設置されているプリンターから写真が出てくる。  
どれも同じ人物がプリントされている。

「そうだ、そうだ、そうだ、そうだ」

狂ったように呟く男は手探りで床に置いてあったビールの缶をとる。  
がぶがぶと飲み、缶を握りつぶす。  
そのまま背後に缶を放り投げ、山になっているごみの中に入った。

「そうだ、そうなんだよ、そうなんだ」

プリンターから出てきた用紙を一枚手に取り、握りしめる。

ぐしゃぐしゃになる程に力強く握りしめられたそれを男は真つ二つに破った。

そのまま灰皿に置き、男が手を当てる。

途端、赤い光が部屋を包み、炎が燃え上がる……

紙は真っ黒な燃えカスとなり、灰皿の上にちりちりと音をたてて散っていった。

## 06 銃口

数日振りに握ったグリップはどこか遠く感じた。

弾倉に弾を込め、目の前に現れる人型に向かって引き金をひく。

ガウンッ、ガウンッ！

全て打ち追われれば弾倉を落とし、新しいそれを一瞬で入れ替え出現するのを撃ち続けた。

現われては消え、違う位置に現れては再び消え……何分もそれを続けていると背後からため息とともに声をかけられた。

「ヘイ、カザメ。ソコらへんにしておいた方がいいぜ」

足元に転がる空の弾倉を目で指し、肩をすくめる男はそばにあったスイッチを操作する。

銃に安全装置をかけ小さなカウンターに置いた風芽の前に、全ての的が現れる。

全て頭、胸、人体の急所に穴が空き、本物の人間だったら即死の部分を確実に貫いていた。

それを見た男は小さく口笛を吹き、「グレイト」と拍手をした。

「前よりウマくなったんじゃないか？」

「最後に会ったのはつい最近だろ」

この男、『ドット』と出会ったのは12の時にアメリカのギルドで、彼が銃の販売をしていると聞き、話しかけたのが付き合いの始まりだった。

まだ子供だった風芽を一对一の客として見たドットに好感を持ち、常連客となったことを覚えている。

銃の扱いを教わったのも彼から出し、自分の銃を預けていたのも彼だ。

ヨーロッパに行くとかかれた後もちよくちよく仕入れをしてくれ、日本に帰る際も銃を預かり、ここまで運んできてくれた。

礼を言っていると、彼は日本に滞在してギルド専門の店を開く、と言って許可証を見せてきた。

ドットは銃の販売人としてギルドを通し、正式な商売をしている。

もちろん、ルールを破ればこの男にも制裁は待っていることを忘れてはいけない。

ずっと前に彼と同じ仕事をしていた男が無免許の客に銃を撃ってしまったことで彼は『制裁』された。

『こういう』仕事は必ず規則が付き纏う。

その点で、ドットはもっとも信頼できる共犯者だ。

「ソウだな……どうだ？ ニホンは」

「変わらないな。」

的に近づき穴をひとつずつ見ていく風芽。

弾倉を片づけながらドットは再会してから変わらない背中を見て、首を緩く振った。

「お前のママには久しブリに会ったんだロ？」

「あの人が一番変わらなかったよ」

「よかったジャねーカ。カゾクが変わらずに接してクレるのハ」

ハハハと白い歯をのぞかせて肩を叩いてくる。

地味に痛いそれにも慣れを感じ、そのまま何も言わずいた。

「ソレにしても、お前にガンは必要ないとオモうんだがナ」

風芽が置いた銃を回収し、ケースにしまった。

そこには多くの種類の銃と、弾が保管されている。

ドットはケースの中でも中心に位置している部分に鍵を差し込み、開けるとそこからアタッシュケースを取り出した。

ズズッと重たそうな音をさせながら引きずり出し、近くにあったテーブルへ置いた。

「ホラよ、預かってたのゼンブだ」

アタッシュケースを開ければ、整備された銃器がバラバラに収納されている。

全て風芽が購入し、ドットに預けていたものだ。

ライフルもあれば、マシンガン、マグナムなども丁寧に保管されていた。

「お前の“力”がアればイラないんジャ」

「俺は区別してるだけだよ」

状態を確認して、満足そうにうなづく。

そのなかの一つを取り出し、組み立てる風芽の手は慣れたもので、すぐに一つの形を成した。

「今回はこれだけで良い」

「もう一丁は？いつも二丁ダロ？」

ドットはバラされたままの銃を見て言う。

風芽はいつも二丁の銃を愛用している。

そのことを知っていたため、珍しいこともあるもんだ、とドットは笑った。

「いいんだ、そこまで『難しい』依頼じゃない」

「確か、護衛だったか？なんだ、今度は誰を護衛シテるんだ？プリンスス？それとも……ドツカのマフィアのボスか？」

スーツ姿の風芽を見て楽しげに言うドットに首を振り、少し考えてから口を開いた。

「妖精」

「フェアリー？」

思わず声が裏返ってしまったドットは、愛銃の握りを確かめている風芽を信じられないものを見るかのような目で見た。

「ドウした？頭でも打ったか？」

空想上の生き物を護衛すると言う彼は普段はかなり現実主義だ。むしろ、理想や空想に厳しい方であつたはず。

「違う。『妖精』って呼ばれてるらしい」

弾倉を出し、弾を入れながら他人事のように言う。

「ナンド、人間か」

「ああ」

安心したように息を吐いたドットを背に、出たままの的に向かって銃口を向ける。

撃鉄は下ろしておらず、撃つ気はないがその目は鋭く射抜いていた。

「ただの、人間だよ」

大きなホールにはピアノの音が響いていた。

何千人が入る席には誰一人おらず、いるのは音色を生み出している冷華だけだった。

学校の制服ではなく、私服姿で流れるような指の動きはいつもより軽そうだ。

舞台裏の扉から入り、幕裏から腕を組んでそれを見ていると曲が終わる。

肩の動きを見て、息をついたのがわかる。

誰もいない客席を見た際に見えた横顔は、凛々しく堂々としていた。

何も言わずに静かになったホールに佇む冷華を見ると、不意に風芽の方を向いた。

「用事は済んだの？」

離れていても、声が響く。

腕を外し、舞台上に向かって歩いた。

「ああ。SPは外か？」

「邪魔だから外してもらったのよ」

彼らも仕事なのだから仕方ない。

そう思いながらも冷華は追い出さずにはいらなかったらしい。

「それで……用事ってなんだったの？」

顔を逸らし、冷華が言う。

護衛に必要な用事を済ませると言って彼女のそばを離れた。

その旨を言った時は「そう」と素気なく返事をもらったため、興味がないと思っていたが、その質問は気になっているらしい。

風芽は僅かに口角を上げ、腰にしまっていたものを取り出した。

「これを」



冷華の細く長い、それでいて大きなピアノистの手に似合わない黒く光る銃を置いた。  
軽くされたそれは手に乗った瞬間に重量感を感じさせ、冷華は両手に乗ったそれを見つめた。

「本物ね」

前に護衛が持っていたのを見た、と言う彼女に頷く。

「使ったことは？」

「あるわけないわ。こんなもの使って手に何かあったらどうするの？」

そう言って返そうとしてくる手を押し返す。

「もっている」と半ば命令的に言われ、冷華は眉を顰めた。

「これは反動も重さも人体に影響はない。君にも使える」

「護身用ってこと？ 犯人に向かって撃てって言うの？！」

銃を握りしめ問うが、風芽は首を横に振る。

彼女の手を取り、銃を持たせたままゆっくりと自分に向けさせた。

そして額に銃口をガリッと押しあてさせる。

その行動に冷華は目を見開き、銃を持つ手が震える。

「な……なにっ」

「ここだ」

そうやって冷華の眼をじっと見つめる。

額に当てられた銃口より、射抜くような視線から眼が離せなかった。

「もし、俺が信用できず、不安に押しつぶされそうになったら、俺を撃て」

銃を持つ冷華の手を握る風芽の手は冷たい。

「これは俺が君を裏切らないという証明でもある」

その言葉の最後に風芽は微笑み、手を下した。

それと同時に冷華の手も下ろされ、銃が床に落ちた。

「弾は弾倉に一発」

銃を拾い上げた風芽がグリップを握り弾倉を取り出す。

そこにはたしかに弾が一発分込められており、そのまま元に戻る。

「撃鉄を下ろして」

カチッと指で下すのを見せ、引き金に指をやる振りをした。

「狙って撃つ」

そのまま撃鉄を戻し、冷華の手に乗せる。

「依頼終了までもっていいればいい。撃ちたいときに撃て」

風芽の言葉に銃を見つめ、握りしめる。

こんなにも重いものを持つと言う。  
ただの護衛のために、自分を殺せと言う。

「ねえ、どうしてここまでするの？」

ギルドなんてお金さえもらえればいいと思っている連中ばかりだと認識している。

そして、自分の命が危なくなれば、逃げる。

今までもそうだった。

なのに、この男は死を受け入れている。

どうしてギルドなんかに入っているのかと聞いた時、答えてはくれなかった。

しかし風芽は答えた。

「君は言った」

冷華に背を向け、そう呟く。

「『ピアノしかない』と」

―『私には……ピアノしかないのよ』

あの時の冷華に冷たい空気はなく、ただ苦しい気持ちしか伝わってこなかった。

ピアノは好きだが、それと同じくらいの苦しさがある。  
そんな矛盾した気持ちがあった。

「人間は居場所がないと生きてはいけない。子供だって、大人だって、関係ない」

「君にはピアノしかないように、俺にはギルドしかないんだ」

それから冷華は銃を鞆の奥にしまい、ホールから黙って出ていった。

何も言わず、ただ黙ってついて行く風芽を引き連れ、会場前に停めてあった車に近づく。

運転席から執事が現れ、後部座席の扉を開けようとした瞬間だった。

カチツと小さな機械音が風芽の耳に入る。

何かのスイッチのような音だ。

それに気づかない冷華を咄嗟に抱きしめ、自分の背を車に向ける。

執事がその行動に驚きながらも扉を引く手は止まらなかった。

冷華が抗議をしようと口を開いたとき、車体の下から爆発音が聞こえ、爆風とともに車を吹き飛ばした。

近くにいた執事は爆発に直接巻き込まれ、炎上した車と共に炎の中に。

風芽は爆風から冷華を抱きしめたまま吹き飛ばされ、コンクリートに背中を打ち付けた。

しかし、そのままじっと車の方を見ながら、冷華に覆いかぶさる。腕の中の冷華は何が起こっているのか混乱、というよりも固まっていた。

あちこちに車の部品が飛び散り、本体からはガソリンが漏れ、再び爆発が起こる。

熱風は辺りを包みこむ。

パチパチと火が燃えているのを見て、風芽は腕の中の冷華をそっと放した。

執事はもう手遅れだが、風芽は物陰に冷華を避難させ、車に近づく。視界に冷華を入れながら、爆発物の痕跡を見つけ、周囲の気配を確認した。

「(去ったか)」

先ほどから感じていた気配は爆発が起きた後に逃げるように消えていった。

これは脅しのひとつだろう。

風芽はそう考え、車の前に膝をつき、眼を閉じた。

「何、してるの？」

抱え、風芽の背後に立った冷華は落ち着いた声で言った。  
眼を閉じたまま手を胸に当てる。

「黙祷」

「……そう」

一瞬の出来事だった。

それだけで何もしていない人間が命を落とした。

眼を閉じる風芽の横で冷華が座るのを感じた。

そっと目を開き彼女を見れば、同じように目を瞑り胸の前で手を組んでいる。

「君、クリスチャン？」

「生まれも育ちも日本だけどね」

母がアメリカ人なの、その言葉に「そうか」と言って目を閉じる。

警察沙汰になることは確実だと思いつつも、風芽は消えた気配のことを考えた。

最初は彼女のストーカーか何かと思っていたが、命を狙われている以上、恨みを買っているという線が強くなってくる。

しかも爆弾という過激なものを使うくらいだ。

人に憎まれる『妖精』。

彼女は眼を閉じたまま祈っていた。

それから警察や消防車が来るのを近くのベンチで座って待った。  
サイレンの音が聞こえると、冷華はため息をついた。

「こんなことしてる暇はないのに」

コンサートが近い今、一分一秒でも練習に当てなければならぬのに、これから警察で事情聴取がある。

車はいずれ持ち主が発覚され、逃げてしまえば事情を根掘り葉掘り聞かれることになる。

だとしたら、最初から説明をすれば印象はいい。

「すぐに帰れる。事情が事情だから、ギルドのこともあるし」

それは、俺が説明する。

「警察が嫌だからあなたを雇ったのよ」

「文句なら犯人に言えよ、俺だってポリ公は嫌いなんだ」

ベンチに腕を回し、いつもより不機嫌そうな口調で言った風芽に、  
冷華はクスリと笑った。

「『ポリ公』って……あなた、意外と口が悪いのね」

「そう？俺は嫌いなものは嫌いだって言うし、言葉も使い分けてる。」

そう言えば、出会った時よりも冷華は笑うようになった。  
最初は冷たい表情と目が普通だと思っていたが、これが彼女にとっての自然な表情なのだろう。

「あなた、お父様に連れてこられたとき、他人行儀で無表情だったじゃない。なんか……自分を見てるようで苛々したの」

「他人だからな」

車が次々に止まり、騒がしくなっていく。

周りには野次馬が集まり、警察が規制を開始し始めた。

「私は、他人が私の領域に入ってくるのが許せないの」

「そうだな、俺もそう思う」

風芽は苦笑いし、それを聞いていた。

「でも……あなたは特別に許してあげる」

警察の人間がこちらに近づいてくるのを見て、冷華が立ちあがる。  
鞆を肩にかけ、背を向けたまま視線だけを向けてきた。

「もし私の領域を侵したら、その時は殺してやるわ」

人差し指と親指で銃の形を作り、風芽に向ける。

「これでいい?」

そう言って笑った冷華は温かく、初めて『女の子』に見えた。



「ただの……女の子、だったか」

呟いた風芽の言葉はサイレンに？き消されて、届きはしなかった。

脅迫状のことは結果的に隠すことになった。

警察に行く途中のパトカー内で冷華が九条院家主に電話をし、事情を伝えると風芽にかわらせ、脅迫状のことは秘密にしろ、と指示されたのだ。

依頼人の指示ということで、何を言われようと脅迫状や犯人のことは何も言わなかった。

会議室のような場所に連れて来られると、冷華と風芽の身分証明を確認しようと提示を求められ、冷華は学生証、風芽はギルドのライセンスを見せた。

ライセンスを見た瞬間、事情聴取をしていた担当刑事は机をたたき、怒鳴り散らしてきた。

警察の中でもギルドのライセンスを知らない人間はまだ新米だ。

この刑事もその一部なのだろう、と風芽は飛んできた唾をハンカチで拭いた。

「署長を呼べ」

命令口調で言えば、さらに怒りを増して何かを言おうとしてきたが、部屋の扉から一風変わった男が入ってきた。

警察の制服を着て、後ろに部下を連れているところを見ると、偉い人間らしい。

彼は冷華と風芽に礼をして、新米刑事を下がらせる。

「署長の藤島です」

「九条院冷華と護衛の志方です」

署長はギルドのライセンスを知っているようで、黒いそれを見て驚きの表情を浮かべた。

「黒のライセンス……話に聞いたことはありますが、初めて見ました」

そう言って目の前の椅子に座った。

署長からは今回の爆発についてはすべて九条院家に管理されることになり、警察は関与しないことを伝えられた。

警察としては事件として取り扱いたいということだが、九条院家の圧力と、ギルドの力が合わさり、絶対的な命令として当主の意向が叶えられた。

ギルドの人間が警察に関与し、そこでいざこざが起きることは少ない。

と、いうよりもかなり多い。

ある意味で様々なことが許可されている機関のギルドに警察はいい顔をしないのだ。

それくらい、『ギルド』というのは法外的異物とされている。

「では、私たちは失礼します」

冷華が立ち上がり、それに続いて風芽が立つが、署長に呼び止められる。

「先にエントランスにいるわ。すぐ来て」

携帯で迎えを呼びながら冷華がエレベーターに乗っていくのを見送る。

署長の方も部下を下がらせ、二人きりになった。

「君は、SSランクのライセンスーだが、なぜ日本に？」

「それをあなたに話す必要があるのか？」

「そうだね、必要ない。だが、君のようにハイランカーが現れると、こちらとしては気になってね」

にっこりと人のよさそうな笑みを受けべてはいるが、腹の中では何を考えていることやら。

嘲笑を浮かべ、風芽はポケットに手を入れる。

ライセンスを取り出し、裏面を見せた。

「ただの里歸りに、文句を言われる筋合いはない」

国籍が日本と記載されているそれを見せられ、署長は「そうか」と頷いた。

「それに、あなたたちはギルドを目の敵にしているが、いつかはそうも言ってられなくなる。」

風芽はエレベーターのボタンを押し、冷たい声で言った。

「それは、どういう意味だい？」

「ただの人間に“化け物”は管理できない……そういうことだよ」

開いた扉に入り、眼を見開いている署長を見て、「失礼」と扉を閉めた。

風芽が去った後、署長に部下が近づいた。

ぽーっと立ち竦む署長を呼び、はっと気付いたかと思うと大きく息を吐いた。

「一体彼は何者でしょうか」

「化け物だよ」

言い捨てるように廊下を歩きだした彼の言葉にぐくりと息を飲み、

部下は後を追った。

「で？」

「……しようがないでしょう！家の車という車を点検してるんだから！」

警察署を出た風芽と冷華は九条院家の屋敷まで徒歩で帰ることになった。

爆発騒ぎが起きたことで、屋敷中の車を点検しているらしく、一台も出ることはできないと。

爆発物が仕込まれていては大変だから文句は言えない。

そこで、風芽がついているということで、徒歩で帰宅しろと指示された。

そして、現在賑やかな町を2人で歩いている。

冷華が前を歩き、少し後ろを風芽がゆったりとついていた。

時々ウィンドウを見ては立ち止まり、心なしか楽しそうな目をしている。

「欲しいのか」と聞けば、「見てるだけよ」とそっけない返事が返ってきた。

「こういうのは初めてだから」

「街を歩くのが？」

「いつも車だもの」

ガラス越しに飾られている服や靴、鞆を見ながら風芽に言った。

「友達は？」

「いるけど、ピアノのレッスンでいつも誘いを断ってた」

学校でも音楽科という音楽を専門的に学ぶ学科で、常に音楽と共にいるという。

家でもピアノを弾き、学校でもずっとそうだった。

「か、風芽は？」

「俺？」

「学生……でしょう？」

「今度高校1年」

そう言うと、冷華は驚きの表情で「嘘」と言った。  
年下？と言われ、考える。

確か、冷華は高校2年になると言っていた。

「いや、君と同年」

「じゃあ、なんで」

「学校は小学校卒業してから通ってなかった。今年から学業に復帰」

「不良だったのね」

呆れたように言われ、苦笑しか浮かべられなかった。

決して不良というわけではなかったが、世間からしたらそうなのかもしれない。

学校行事にも積極的ではなかったし、ギルドの仕事しか興味がなかったからその言葉に反論は出なかった。

「学科は？」

「普通科しかバイトは許されていないからそこ」

「バイト、ね」

知らないうちに、風芽と冷華は多くのことを話していた。

冷華が質問すればきちんと風芽は答え、気になれば風芽の方から質問した。

後ろを歩いていたはずなのに、いつのまにか冷華がゆっくりと歩き始め、風芽と並ぶ。

「（ああ……なんだか）」

冷華は隣を歩く風芽を盗み見る。

自分の鞆には彼を殺すためだけにある銃がしまわれている。

「（不思議ね）」

こんなに長い距離を人と歩いたのは久しぶりだった。

ただじっとピアノを弾く自分を見て、時々違う場所を見て……  
何も言わずにただじっと見守っている。

でも、あの爆発の時、身を挺して守ってくれた。

強く抱きしめられ、彼の心臓の音が近くに聞こえた。

まるで人形のようなだと思った時があったけれど、彼は『人間』だった。

とくん、とくん

そう、音がしていた。

心臓の音は人を安心させるという。

「（ああ、本当だ）」

そう感じた時、冷華は車の爆発なんてどうでもいいと思った。  
さっきまで緊張していたのになぜだろうと考えていた。

しかし、風芽が黙祷をしている姿を見て、自分を恥じた。

「（私の代わりに死んでしまった）」



護衛の人間は今まで何人もいた。

九条院家の人間というだけで、命を狙われ、その度に代わりに誰かが死んでいった。

それが役目だった。

そうやって冷華は自分が目をそらしてきたことを思い出す。

自分をかばって銃弾に倒れた護衛を見て冷めた視線を向けた。

そんな自分が今までいたことに、急に心が締め付けられるようだった。

無意識にそこに座り込み、十字をきる。

その時、初めて九条院冷華は『他人』の為に手を合わせた。

## 07 能力

爆発事件から2日後、コンサート前日になり取材などで引っぱりだこになる冷華を付きっきりで護衛をした。

カメラに映るわけにもいかないが、何が起きるかわからないような時に気にしている場合ではなく、サングラスをかけることにした。真っ黒なガードマン姿になった風芽は髪形もとりあえず変え、カメラに写っても差し支えないものに変装していた。

カメラのシャッター音とフラッシュが冷華を包み、マイクが差し出される。

「今回のコンサートは初の単独コンサートということですが」

「はい。応援してくださる皆様にお応えできるよう、私の全てをお聴かせします」

写真を撮られていてもその表情は変わることなく無表情で冷めている。

彼女はいつもインタビューの時はこの調子で、ファンには「そんなところが魅力的」と言わせているらしい。

まだ、海外に進出はしていないが、一度大きなコンクールで優勝し、その後大きくデビュー。

国内のコンクールに気まぐれに参加しては優勝をかつさらって行く。

その音色はまるで妖精の奏でる魅惑の心地……

「『後に、ピアノの妖精として注目される』、と」

コンサートの最終チェックでスタッフと打ち合わせしている部屋の隅に椅子を置き、雑誌を読む。

風芽の仕事はあくまで護衛のため、コンサート自体はどうでもいい。爆発事件以来、何もしてこないと言うことはコンサートで何かをやらかす可能性が高く、とりあえずのところ彼女の評判について知る為に雑誌を買ってみた。

音楽雑誌、女性雑誌、新聞、あらゆるところに彼女の写真が載せられている。

手元にコーヒーを用意して、隣に置いたもう一つの椅子に乘せ、ページをめくる。

今回のコンサートは大々的に宣伝しているらしく、チケットは完売、オークションでは何万円もの値打ちが出ているとか。

なんとなくプロフィール欄を読んでいると、意外なことが書かれていた。

「『好きなものはピアノ、嫌いなものは……飛行機』い？」

「悪い？」

不機嫌そうな声色で、雑誌に影を作ったのは写真に写る顔だった。

「飛行機嫌いなのか？」

「浮遊感が嫌いなのか」

椅子に置いてあったコーヒーを取り、そこに座る。

風芽は何も言わず、雑誌を見て「ふーん」と言った。

「そう言う人はたまにいるよ」

「お父様も苦手らしいわ」

「親子でか」

そう、とコーヒーのカップの蓋をとり、勝手に飲む。

勝手に飲むなどはいまさら言えず、放っておくことにした。

「打ち合わせは？」

「あとはスタッフに任せるわ。私は演奏に集中したいから」

目の前で真剣な表情で話し合うスタッフを見ながらそう言った。

打ち合わせをしている時に一生懸命に確認をしているのを見て、余程冷華を慕っているらしいということがわかった。

「風芽のことはちゃんと言っておいたわ。何かあったらコンサート会場を自由に行き来できるようにしておいたから」

「じゃあ今日明日で周りを下見しておく」

また爆発物が仕掛けられでもしたらたまらないからな。

彼女の持つカップをとり、口をつける。

冷華が俯いたが、気にせずに飲みほしてしまいそれに気づいて首をかしげた。

「なんだ、新しいの持ってきてやろうか？」

「いえ、結構よ」

「そうか？」

空になったカップを持って立つと、冷華はこちらを見上げてきた。

「どこ行くの？」

「とりあえずグルッと一回りしてくる」

ズレかけたサングラスをかけ直し、カップを握りつぶす。

座ったままの冷華にここにいるように言ってから打ち合わせ用の部屋から静かに出た。

廊下には時々スタッフカードを下げた人間が通るだけで、それ以外の人間は立ち入り禁止となっている。

冷華の言ったとおり、風芽が歩いているとスタッフが丁寧にもあいさつをしてきた。

それに手を軽く上げることと返すと角を曲がり、前に覚えた会場の図面と照らし合わせながら非常出口を見つける。

「鍵はかかってねえな」

扉を開けて外に出れば、会場を囲む森林が見える。

ここは裏手になる為、人は滅多に通らないようだった。

円形の建物になっているコンサート会場は駐車場も入口も正面に位置している。

裏手を通るのはスタッフやただの通行人などだけになるだろう。

「ん？」

ふと鼻を掠めた異様な匂いに風芽は立ち止まった。

風に乗って飛んでくるそれに眉を顰め、気配を消して近づいて行く。

「（これは……火薬の臭い）」

壁に背をつけ、そっと臭いの元を見るとそこには蹲るようにして座っている小太りな男がいた。

カチャカチャと音を立てて何か作業をしているようだ。

こちらの気配に気づいていない所を見ると、『素人』であるらしい。

それに、この男の気配はあの時の爆発事件の近くにいた奴の気配だ。

足音を立てずに胸元からゆっくりとある物を取り出し、男の首に当てる。

「今度は何を爆発させるんだ？」

耳元で囁くようにいうと、男は肩をびくつと震えさせ、ひたりと添えられているナイフに気づいた。

手元が止まり、冷や汗をかいている男にナイフを皮膚まで1?残し、ぴくりとも動かさずに問う。

「お前だろ、脅迫状作ったのは」

「あ……あああ……ぼぼぼぼ、僕はっ」

男が何かを言おうとすると、風芽は男の首をホールドし、横に飛退いた。

ドガアアアン！

着地すると機械の手前に大きな爆発音とともに小さく爆発が起きた。地面に焦げ目が付き、かろうじて爆発物らしき機械には被害はない。その衝撃で男は気絶してしまい、邪魔になる為草むらに放って隠す。

「（手榴弾ではない……火炎系のSAIか）」

次々に放たれる火の玉を避けながら、位置を把握し持っていたナイフを木の陰に投げる。

わざと外し、舌打ちをした相手をそこから引きずり出す。

影から出てきた能力者は掌に火の玉を出現させては闇雲にこちらに向かって放って来た。

その表情は今まで見てきたのと同じ、『狂った』もの。自分の知っている能力者の顔ではない。

風芽は心の中で笑った。

草陰で気絶しているデブはこいつに指示されたのだろう。

この機会もブラフだ。

懐から改造銃を取りだし、会場から放すため誘導するように狙い撃つ。

誰も通らないような場所に来ると、能力者は火の玉を持ったまま止まった。

「てめえ、九条院冷華の護衛か？」

発せられた声は低いもので、息が切れている。  
弾倉を買えながら風芽が肯定すると男は舌打ちをした。

「どいつもこいつも、九条院、九条院……」

男がつぶやくたびに炎が揺らめき、怒りと共に大きくなっていく。  
S A I能力者としては覚醒しているようだが、制御に関してはまだ完全ではないらしい。

能力が感情に左右されるようではまだ完全なS A Iとはいえない。

「（はぐれか）」

能力者は覚醒したとき、その能力を管理するためにギルドに記録されることになっている。

ギルドのライセンスにはなることはないが、能力者は犯罪者になることが多いため、それを管理する必要があるのだ。

しかし、故意でギルドに記録されていない能力者は『はぐれ』と言われ、罪を犯す可能性ありとして危険視されるのだ。



「俺は特別なんだ。なのにい！」

「火炎能力はそう特別な能力じゃない。発火なんて道具を使えばいくらでもできる」

「無能力者が偉そうに……」

男は火の玉を風芽に向かって放った。

しかし、風芽は首を傾げるだけで避け、銃を懐にしまった。それを見て、男は高笑いをする。

「もう降参か、だから雑魚は」

「お前如きにあんなおもちゃでももったいない」

黒いネクタイを緩め、サングラスをとる。

その瞳はゆらりと光り、獲物を狩る鷹のように鋭いものだった。

「別に、お前が九条院冷華を狙ってる理由はどうでもいい」

胸ポケットにしまわれたサングラスがかちりと音を立てる。風芽の一挙一動に男は掌に火の玉を浮かべながら見ていた。

「（動けない）」

視線に捕らわれた瞬間から男は息を飲むこともできない。

「お前がはぐれである以上、どんな“雑魚”でも見逃さない」

「無能力者に何ができる！」

馬鹿の一つ覚えのように火の玉をむやみやたらと投げつけてくる男を鼻で笑い、動く。

その瞬間風芽が視界から消えた。

男は周囲を見渡すが焼け焦げた木々しかない。

「ど、どこにっ」

すると、背後にわざとらしい気配が現れる。

「能力者として消えたいか？それとも……」

冷たく言葉を紡ぐ風芽の声が鼓膜を刺激する。

その問いに男は足が震え、威圧感に耐えきれなくなりつつあった。

風芽が口を開き、手をあげたと同時だった。

ドガアアアアアアン！

先ほどの機械があった場所から爆発音が。

思わず手を止め、そちらを見ると、煙が立ち込めている。

あそこには気絶しているデブがいたな。

風芽は手を下げ、そちらに向かって歩き出した。

「あ……あ……」

「今回は見逃してやるが、次に会った時には決めておけ」

そう言われた男は崩れかけていた足を叩き、悔しさの表情と共に逃げ去っていった。

爆発音のした方へ行くとまだ人は集まっていないらしい。  
会場は防音設備になっている為外の音は聞こえにくくなっているのだ。

冷華に気づかれると、何かを言われる恐れがある。

面倒なことは避けたいため、気絶している男から事情を聞きだす前に、飛び散った機械の残骸と焦げ跡を見渡す。

「（小型の爆弾だったか）」

はぐれのS A Iを逃がしたのはまあいいとして、依頼に支障をきたすのはよろしくない。

風芽は爆発痕に手を添える。

彼の手はただ添えられているだけだった。

「『修復』」

自身の呟いた言葉は本来意味はない。

ただ言葉にすることで強く働くと自分で思いこむことができる。

すると掌が接している場所からだんだんと焦げ目がコンクリートに戻り、地面が意思を持っているかのように抉れた部分をふさぎ、黒くなった地面も薄い茶色に戻っていく。

まるで魔法のように何もなかったようにもどったそれを確認し、風芽はネクタイを締め直した。

草陰からデブを引きずり出し、首元を持って近くの倉庫に放り込んだ。

「大人しくしてろ」

扉を閉め、手を添える。

何の変哲もないように見えるが、扉はズズッと音を立てて地面にめり込んだ。

まるで、急に重くなったかのように地面にめり込んでいることで開くことのなくなった扉。

携帯電話を取り出し、画面を見るとかなり時間がたっていた。

冷華を待たせたままだったことを思い出し、急いで打ち合わせの部

屋に戻ると、さっきと同じように椅子に座る彼女がいた。

「遅い」

「ちょっと迷子がいて、“安全な場所”まで連れて行ってやった」

「そう。打ち合わせも終わったし、帰るわよ」

「ああ」

荷物を受け取り、彼女のあとをついて外に出る。

すでに車が付いており、今度は不審物の確認はすんでいる為、安全だと扉を開ける。

風芽は荷物をトランクに入れ、車内に入った冷華を見て扉を閉める。自分は車の外にいるままだ。

「どうしたの」

「用事ができた。今日は“何も”起こらねえから、安心して帰れ」

「用事って?」

「こっちの話だ。君には関係ない」

そう言うと、冷華はむっとし、ウィンドウを閉める。

「出して」と強い口調で言う彼女は最後までこちらを見ることはなかった。

「さてと」

デブは能力者の男の兄らしい。

拷問のように脅しをかければぺらぺらと話したそいつの兄は元ピアノリストだった。

そこそこ実力があり、あるピアノコンクールで優勝候補と呼ばれていた。

しかし、そこに突然現れたのは九条院冷華だった。

急に現れた彼女に優勝を？っ攫われ、名誉を傷つけられ失望し精神的におかしくなっていたのだと。

そして、あるとき怒りが爆発するかのようには発火能力が覚醒したという。

その力と弟を使って復讐をしようとした、というのが今回の事件の全てだ。

弟はもともと爆発物に詳しい、いわゆるオタクだった。

それを利用し、兄という立場をも使って強制的にやらせていたのだと言う。

「く、車を爆発させるだけって言われて……でも、気になってみにいったんです」

そうしたら、人が巻き込まれて……そう言って愚図りだす。

「主犯はあんたの兄だが、あんたも共犯者としての責任がある。わかってるな」

「はい」

どうやら聞き分けがよく、風芽が兄を捕まえたら自分は警察に、兄はギルドにそれぞれ責任を果たすと誓った。

問題はその兄だが、必ず明日のコンサートには来るだろう。

あの程度の能力ではコンサート会場ごと爆発させることは無理だ。それに、協力者の弟の爆弾ももう使うことはできない。

狙われるとしたら直接冷華本人を襲ってくるだろう。

「あんたはことが済むまでここにいろ」

「は、はあ」

「出ようとしても扉は開かないからな」

風芽が施した何らかの作用で扉はかなりの重量を持っている。そのためか、人一人じゃ絶対に開けられない。

「逃げません」

「まあ、逃げたらその時はもう簡単に死ねないと思え」

きらりと笑顔でナイフを見せる。

「は、はひひひい！」

ガチャリ

倉庫の扉を閉め、再び手を添え沈むのを確認して立ち去る。

「（俺の笑顔はそんなに怖いか）」

よく愛想笑いなどで笑うと顔を背けられたり、逃げられたりする。自分の顔にはあまり興味はないが、そこまで避けられると自信がなくなってくる。

ブルルルル

ため息をついて先ほどから振動している携帯を取り出す。

会話ボタンを押し、耳に当てた。

「はい」

『兄様』  
あに



電話の向こうから聞こえたのは小さく掠れる女の子の声だった。聞き知っている声に、「ああ」と返事をする。

『兄様、日本にいるの?』

そう言われて、彼女に帰国したことを伝えてなかったのを思い出した。

「悪い、教えるの忘れてた」

その言葉に向こう側から何やら引きつるような音が聞こえてきた。

『織華<sup>おりはな</sup>は、兄様に会うために、ひっく、イタリアまで来たのにつ』

自分を『兄』と慕ってくれている少女、織華は風芽の妹ではない。しかし、それに近い関係はあると思っている。

「本当に悪いな。今里帰り中で、しばらくは日本から出ないんだ」

『……も……る』

「ん?」

『織華も兄様と一緒に日本に住む!』

「へ？は？」

『すぐに、行く！』

ブチッ

急に切られたそれをぼーっと見て、意向が停止した。  
ツーツーツーとなっっている携帯をしまい、頬を掻く。

「なんてこった」



## 08 当日

―コンサート当日―

開演まで1時間といったところだ。

しかし、風芽の近くに冷華はいない。

先ほど衣装に着替えたかと思うと、

「気が散るからついてこないで！」と怒鳴られた。

言うことをきく必要はないと言った矢先、女子トイレに籠ってしまっただ。

「入るわけにはいかないよな」

それくらいの常識と恥は持っているわけで。

トイレ内には窓が一つあり、侵入する入り口にもなりうる。

なるべくならそこも見えておきたかったが、何分風芽も男だ。

だからこうしてトイレの前で警備をしているしかできなかった。

壁を背に寄りかかっているのをスタッフがクスクスと笑って通り過ぎる。

恥ずかしさよりもだるさが上回っている今、ため息しか出てこない。

「（発火能力だけならどうにでもなるとして、人質とかとられたり

したら面倒だし、大人しくしててほしいもんだ」

冷華がじっとしていてくれれば護りやすいのだが、彼女がそう大人しくしてられる性分ではないことはこの数日でよく分かった。

なんにしろ、依頼は今日で終了だ。

依頼料も結構な額が入るから母さんに何か買っていこう。

銃と一緒にドットに預けてたワインも受け取ってかなければ。

そんなことを思っていると、冷華が入口から出てきた。

「トイレの前で何してるの？」

「警護」

「熱心なのね」

「ギルドはそう言うものだからな」

そう言うと、冷華は目を逸らし歩き出した。  
その数歩後ろをついて行く。

「今日で最後ね」

「そう言う契約だ」

依頼主は君の父親だけだ。

「そういえば九十九中央学園を受験したんでしょう？結果は？」

「合格」

昨日、織華の爆弾発言後に母から電話でその旨を伝えられた。  
これで晴れて学生生活に再デビューね、と言われ苦笑いしたのを覚えて  
いる。

「じゃあ私の後輩になるのね」

「学科は違うから会う機会なんてないだろ」

控室に着き、椅子に座った冷華に冷たい飲み物を差し出す。

「そう、ね」

コップを両手で持ちながら顔を俯かせる。

風芽は携帯を見た後、冷華の向かいの席に座った。

静かな部屋は沈黙のみだ。

「ねえ、かざ……」

「しっ」

話しかけようとした冷華の口を風芽がふさいだ。  
驚いた彼女は眼を見開き、風芽を見る。

部屋の中をゆっくりと見渡し、眼を閉じた。  
静かな部屋で耳を澄ませる。

チ……カチ……カチッ

その音をとらえた後の行動は早かった。

冷華を抱き抱え、扉を開け放つ。

廊下に飛び出し、扉をしめた。

そして、手を添えた瞬間だった。

控室の中から大きな爆発音が聞こえ、震動が伝わってきた。

「ちっ」

ドアは熱を持ちはじめ、そこから手を放す。

「残った爆弾か」

「つぶは……なんなの？」

「犯人の悪あがきってやつ」

解放された冷華は立ち上がり、乱れた衣服を整える。

控室はもう使い物にはなくなっているだろう。

ここに爆弾が仕掛けられたと言うことは、犯人は内部に侵入しているということだ。

他の警備の奴は何してるのやら。

先ほどの震動でスタッフが駆け寄ってくる。

が、その中に見知った顔を見つけた。

「（ほんとに、甘い警備だな!）」

風芽は冷華の手をとり、「来い」と言ってその場から離れた。

「何?!」

「とにかく、広い場所に行くぞ!」

「ちょ、ちょっと!」

冷華はつかまれている手を振り払い、走るのを止めた。

「説明しなさい!」

「死にたいのか?!」

ドガアアアン!!

近くで爆発が起こり、冷華が爆風で飛ばされそうになる。  
とっさに庇い、彼女ごと壁に叩きつけられた。

なんつうデジャブっ。

「うっ……」

「ったく!」



「見つけたぞお！九条院んんん！」

他のスタッフは先ほどの爆発で気絶してしまったのだろう。

犯人の男はこちらに走ってくる。

その手には前よりも大きな炎が浮かんでいた。

この狭い通路で爆発はさすがにヤバイ。

再び放たれる炎に風芽はしかたない、と舌打ちをして手を掲げた。

「『変換』」

空気を掴むようにあげられた手の手前でその炎は消え去った。

先ほど爆発した場所に燃えていた炎も一緒に一瞬で消火されたように焦げ目のみが残っている。

男は目を見開き、自分の手から消えた炎を探した。

「なんだ?!何がっ!」

そう言いながら再び自分の手に炎を生み出す。

「馬鹿の一つ覚えか」

「うるせえ!」

放たれた炎は再び風芽たちの目の前で消え去り、何度も何度も繰り返すが、それが彼らに届くことはなかった。

肩で息をする男は顔をゆがませ、風芽を睨む。

「おまえ、無能力者じゃなかったのか!？」

「だれがそんなこと言った？」

無表情のまま答えた風芽は冷華を背に隠している。

男はそれを見て、手を震わせた。

「その女を渡せ! そいつは俺の人生を奪った!」

指を差された冷華は肝が据わっているためか、その言葉には動じなかった。

そして、首をかしげて言った。

「私、あなたのこと知らないのだけれど」

「なあっ?!」

男は自分を覚えていないと言った冷華に驚愕の表情を浮かべた。そして、拳を握りしめる。

「そうやってお前は俺を見下してっ」

「小さな男だな」

「なんだと？」

「たった一つの挫折で全てを失うんだ」

そうやって隣にあった扉をあけ、冷華を突き飛ばし鍵をしめた。  
これで邪魔はいない、とサングラスをとる。

「それで、決めたのか？」

「何をだ」

「能力者として消えたいか、それとも……人間として消えたいか」

遠くで足音が聞こえる。

それも大人数の。

男は焦る心と裏腹に、風芽の前から動けなかった。

「聞こえるか？ お前を捕まえに来たやつらだ……もちろん警察なんかじゃない」

そう、警察なんて生易しいものではない。

「能力者にはその力と相応の責任が伴う。許可のない殺人は、絶対に禁止されてる。お前はそれを犯した。あの足音はその罪人を捕えるために派遣された奴らだ」

どんどん近付いてくる音は男にとって恐怖の対象でしかない。

そして、目の前にいる男は執行官に見えた。

「人間として罪を償うか、能力者として裁かれるか……どちらを選ぶ？」

「お、俺はっ俺はあ！」

恐怖が限界を超え、ヤケクソになったのか、能力を爆発させようとする。

しかし、その手に炎は現れることはなかった。

「な……どう、して」

「所詮、火は燃やすものがなければ現れない」

足音が近づく。

「まあ、殺すわけにはいかないから、生存レベルギリギリには残してあるけど」

「お前……なんなんだよ……」

「なに……ただの“化け物”だよ」

「SAI管理局だ！その二人、手を挙げる！」

足音共に周囲を囲んだのは軍服のような格好をし、その手に銃を抱えた人間だった。

SAI管理局はその名の通り、SAI能力者の管理、研究を行っている機関だ。

それはギルドと繋がりを持つが、別の機関と考えられている。

能力者による犯罪を取り締まっているのは管理局だが、ギルドの人間に依頼することもある。

管理局と聞き、焦る男と対して風芽は冷めた目のまま男を見ていた。

動かない2人に、管理局の人間は銃をつきつける。

風芽は懷からライセンスを取り出し、見えるように提示した。

「連絡したのは俺だ」

「ぶ、黒のライセンス?!」

黒く光るその一枚のカードに動揺が走る。

しかし、それを遮るように風芽は言葉を発した。

「その男はぐれの発火能力者だ。拘束するなら早くしろ」

「ちっくしょー!」

動かない管理局の人間の隙をつき、男は逃げだす。

向けられた銃はただの脅しであり、それを分かっていた男は走りだす。

「役に立たないやつらだ」

踏み出そうとした男の足は、床から離れた。

「うっぐああ！」

男の首を風芽がつかみ、両手を片手で拘束する。  
それと同時にグキリとやけにリアルな音が響いた。

「だから、早くしろって言ったのに」

男の手首はあらぬ方向に曲がり、激痛と酸欠で悶えていた。  
その光景を見た管理局員は気がついたように銃を向ける。

「や、やりすぎです！」

「やりすぎ？……君たち新人？それとも、馬鹿？」

風芽は鼻で笑い、男を掴んでいた手を緩め、床に落とした。

「能力者をなめてると、早死にするぞ」

苦しみもだえる男を局員たちが拘束し始める。

「能力制限の首輪は必要ないだろ」

「それは、どういう……」

そう言った風芽の言葉をききながらも、用心のために男に首輪をはめる。

能力の発動を抑えるために作られた特殊な装置だ。

主に罪人にはめられるもので、手錠のような役目を持っている。

「まあ、あとは勝手に処分しろ。ギルドにもそっちから報告してくれ」

はぐれの管理はあんた達の担当だろ。

しよせん、管理局の人間は無能力者が多い。

ギルドと同じような機関でも、力関係はギルドの方が強いのだ。

そう言った点で、管理局とギルドも警察と同じくらいいいがみ合っている。

ギルドはどこに行っても異端。

「（無駄な時間食った）」

風芽は冷華を放った部屋の扉を開ける。

中から開けられないように扉に細工したため、冷華は静かだった。

ピアニストが扉をたたくなんてことしないだろうし。

開けた瞬間、影が飛び出してきた。

「なにがあつたのよ！」

「開演まであと五分だぞ」

「説明しなさい！」

「犯人は無事逮捕、はい終わり」

背後にいる管理局員と拘束されている男を見て、冷華は事態を飲み

込んだ。

「早く行け」

「でも」

「もう護衛は必要ないだろ、依頼は終了だ」

きっぱりとしたその言葉に、口を噤む。

舞台はすぐ近くの扉から行ける。

犯人は捕まり、自分を襲う人間はもういない。

「さっさと行け」

「聴いて行くでしょう？ 依頼はコンサート終了まで、なんだから」

「行けよ」

それに答えることはなかった。



ブ――――

その音によって幕が上がり、一台のピアノが置かれている舞台が現れた。

大きな拍手と共に主役が登場する。

彼女は客席を大きく見渡した。

しかし、そこに求めた姿はなかった……

がち  
ゃ

玄関を開ければ、そこにあるはずの靴はなく、部屋の中も暗かった。リビングに置かれたテーブルにはラップのかかった食事と一枚の紙があった。

母の字で書かれたそれには「コンサートに行ってきます、夕飯は温めてね」とだけ。

「そういえば、ピアノ好きだったんだっけ」

依頼の終了を確認してからすぐに会場を出た風芽。

ピアノの演奏は聞かずに九条院家の当主にその旨を連絡してからギ

ルドに寄って帰ってきた。

ただの護衛対象の願いを聞き届けることは依頼には入っていない。  
むしろ、それをするこの方がおかしいのだ。

そして、依頼が終了した以上、ただの赤の他人と変わる。  
いつだってそうだった。

今までもそうすべきだという考えは変わることはない。

ネクタイを取り、上着を椅子の背に掛ける。  
皿を手にとって触れる。

それだけで冷めていた食事は温かくなり、湯気を出していた。

母の前では一度しか使ったことのないこの能力。

風芽はS A I能力者だ。

覚醒したのは小さな頃……

同じ能力者に襲われた時、その能力者を“無能力者”へと変えてしまった。

その時から自分の運命は大きく変わったのだ。

能力の性質が理解できるころには『連結』と呼ばれはじめた。

触れたものはすべて自分の中で情報化し、書き換えることができる。限界などない。

空気中の酸素を指定した範囲のみなくすことも

壊れたものを元あった状態に戻すことも

形も、質量も、性質も、全てを変え、操ることができる。

まるで神のような力だ、と誰かが言った。

そんなにいいものなら、今頃自分はこんなことをしていないだろう。

これはただの“力”だ。

使い方を間違えれば化け物なんて言葉じゃすまなくなる。

そうしたら……

――母さんは俺を見捨てる。

いや、今まで自分がしてきたことを母が知るだけで、それだけでも恐れられる。

温かくなった皿のラップを外し、手掴みで食べた。  
味のしみ込んだ煮物だ。

「ん……」

んまい。

この味が味わえるのはいつまでなのだろうか。

「やっぱり、日本人は和食だな」

こうして依頼が終わるとともに、元の“日常”に戻るのだ。

スイッチが切り替わるように。

何もなかったかのように。

本日依頼終了。

依頼料…日本円で3000万円。

犯罪者逮捕報奨金…ランクD、日本円で100万円。  
合計、3100万円。



## 09 入学

4月になり、新学期の始まりとなる。

今年から九十九中央学園に入学になる生徒が全員大講堂に集められ、教員や来賓の人間に囲まれて入学式が行われた。

その中の一人として風芽は座っていた。

長い話に欠伸を噛み締めながら、眠気と戦っていた。

夜遅くまで銃の整備と、普通の学生が持つべき持ち物について考えていたのが原因。

今まで自分が持って来たものといえば、銃にナイフにライセンス、財布……時々ワイヤーなどで。

しかし、学生ならそんなものは持たないと相談しに行ったドットに言われた。

小学校の時はランドセルに入っていたものをそのまま持って行っていたため、気にしたことはなく、筆記用具だけ持っていくのが正しいのか、“装備”をして行った方がいいのか……

などと聞いたら、大笑いをされたので彼のお気に入り銃に不細工な顔の装飾を『形成』してやった。

とりあえず鞆を改造して、銃を解体して隠し、筆記用具と財布だけ入れた。



座っている椅子の下に鞆を置き、壇上に上がって先ほどから長い話をして、再び口元に手をやる。

風芽と同じように眠そうな人間は何人もいるようで、前の方に船をこいでいる生徒が見える。

ツンツン

右側からつつかれ、視線だけ向ける。

「なあなあ、お前普通科？」

小さな囁き声だが周りが静かなせいでよく聞こえる。

茶色い髪がふわふわとしているそいつは同じように視線だけをこちらに向けていた。

胸元には普通科を示すバッジがあり、自分がつけるのを忘れていたのを思い出す。

小さくうなずくと、そいつは「俺も」と言って笑った。

「俺、赤石陸奥」  
あかいし むつ

よろしく。

そう言って手元でピースを作った。

「志方風芽」

小さな声で名乗り、見えないようにそっと手を差し出した。

陸奥はその手を見て悪戯っぽく笑い、ピースしていた手で握った。

それから入学式が終わるまで何も話さず、時々隣で陸奥が笑うのを感じた。

「へえー、風芽は帰国子女かあ」

式が終了し新生全員が退場した。

一時的に解散となり、クラス分けを各自で確認してから教室に移動となる。

風芽の隣に制服を着崩している陸奥が並び、大きく伸びをした。

普通科のバッジを鞆の中から見つけ、胸元につけようとしているのを見て、バッジを取り上げた。

つけてやるよ、と言って手際よくつけられた。

「そんな感じ」

「じゃあ英語とかぺらぺら？」

「だいたいの国の言語なら」

世界各地のギルドを転々としていたので、その土地の言語を覚えてきたのだ。

英語はもちろん、イタリア語、フランス語、中国語、韓国語……そ

の他のメジャーな言語は一通りできる。

かっこいいー、と陸奥が言う。

「陸奥の方がかっこいいと思うけれど」

茶色い髪はたぶん地毛みたいだし、顔の造形も整っている。

日本でいうところの、ジャ●ーズみたいな感じだ。

英語が話せるからといって“かっこいい”というカテゴリーには当てはならないと思う。

風芽の言葉に数秒固まったが、陸奥は急に笑い出す。

「あっはっは！それ、お前が言うことじゃねえって！」

「そ、そうか？」

「そうそう、お前の方が十分それだから」

首を傾げる風芽の肩をバンバンと軽く叩いた。

陸奥の軽いノリに慣れないものを感じ、少し動揺する。

小学校でも親しい友人というのはいなかったと思うし、今まで関係してきた人間もきちんとボーダーラインを超えないように接してきた。

“高校生”という範囲での関係はよくわからないのだ。

「風芽って面白いやつだなー。話しかけて正解」

「面白い？初めて言われたよ」

「マジ？ いや、イケメンだし天然っぽいしさ」

イケ？？？天然？

「それも初めて言われた。」

「だろうな！」

「いつもは『変な奴』とか『変わってる』とか」

ついこの間も言われたはず。

それを言うと、陸奥はそれもありだな、と笑った。  
俺からしたら陸奥の方が面白く見える。

「ま、よろしくってことで！」

「ああ」

「まずはクラスだな！ 一緒だと良いなあ」

掲示板には生徒が群がり、前の方には進めなくなっている。

見た人間もなかなか外に出られなくなったりしていて、混雑していた。

陸奥がジャンプしながら見ようとするが、なかなか見えないらしく駄目だなと呟いた。

なるべく遠くからでも見えるように人の頭より上の位置に張られているようだが、異常に遠すぎて見えないらしい。

風芽は目を凝らす。

「Gクラスだ」

「見えんの?!」

風芽の身体的能力はかなり高く、視力も聴力も優れている。別段隠すことでもないので、ああ、と答えた。

掲示板を見ながら答えた風芽に驚き、陸奥が目を見開く。

そのまま見ていくと陸奥の名前も同じクラスにあるのを見つけた。

「陸奥も」

「よっしゃ!」

わかればもう用はないと言わんばかりに背を向けた陸奥について行くこうとすると、横に見たことのある顔を見つけた。

小さな背で限界まで背伸びをしながらもプルプルと震えている。それとともに黒い髪が揺れていた。

「どーした?」

「あ、いや……」

陸奥は風芽が見ていた人物を見ると、眼を光らせた。

「お!可愛いー、誰?知り合い?」

「入試の時にちょっと」

バランスが崩れ、ふらつく身体を休めるように足をつき、肩を落として大和撫子……古野枝咲のその肩をポンと叩く。振り向いた彼女は風芽の顔を見て沈んでいた表情がぱあっと明るくなった。

「か、風芽さん！」

「咲、だよな。久しぶり」

「はい！」

入試の時とは違う、高校の制服を纏い結っていた髪もストレートに流していた。

「髪おろしたのか？」

「に、似合わないでしょうか」

そう言って自分の髪を指に絡め、もじもじとしている咲は顔を少し赤く染めていた。

「可愛いと思う（ツインテールよりいいかも）」

「はう！」

（そんな、か、可愛いだなんて！）

笑顔（営業スマイル）を浮かべた風芽。

惚けている咲と笑顔の風芽を見比べながら陸奥は呆れた顔をした。

「（無自覚……ですねー）」

知り合ったばかりだが、風芽がモテるのはよくわかる。  
日本人にしては珍しい眼の色に、整っている顔。

さっき、陸奥をかつこいと言っていたが本当に思ったことをそのまま言っていたのだろう。

「クラス、見えないなら見ようか？」

「えっ」

「芸能科だっけ？……B1クラスだってさ」

九十九中央学園では特殊学科は2クラスずつ、一般の普通クラスは3クラスに分かれている。

特進科はA、芸能はB、音楽はC、武術はD、美術はE、普通はF・G・Hとなり、特殊学科は成績順に1クラスと2クラスというものに分かれる。

たとえば芸能科ならBだが、上のクラスなら1がつき、B1クラスとなる。

普通科は成績順ではなくランダムに組まれている為、数字はついていない。

つまり、B1ということは咲は優秀だということになる。

「ありがとうございます」

「あ、そうだ。こっち、さっき知り合った赤石陸奥」

「よろしくー」

一応、友人というカテゴリーに当てはまるのなら紹介ぐらいはしなければ、と朝家を出る前に言われた母の言葉を思い出す。

『風芽は人当たりはいいのに、お友達は少ないんだから。ちゃんと仲良くするのよ?』

『ぜ、善処する』

『『善処する』……じゃなくって! 『わかった』でしょ?』

『わかった』

とりあえず、陸奥は咲のことを可愛いと形容していたから、“好き”の部類に入るはず。

「私は、古野枝咲と申します」

丁寧に挨拶をした咲につられ、陸奥も「あ、どーも」と頭を下げた。そのおかしな風景に苦笑いを浮かべる。

「そろそろ、教室行かないか?」

「あ、そーだなあ……あ! 咲ちゃん咲ちゃん、アドレス交換しよう!」

そう言って携帯電話を取り出した陸奥。



そういえば……と風芽も連絡手段がなかったことを思い出す。

「俺も交換しようと思ってたんだっただけ」

「んじゃ、俺のとも交換しとこうぜー」

風芽も携帯電話を取り出すと、慌てて咲も鞆から出して開いた。操作をしていると、身を乗り出して陸奥が風芽の携帯を見てきた。

「それ、新しいの？」

「よくわかんないけど、最近買った」

前のは血がべったりとついてダメになったから、などとは言えまい。この携帯電話も何代目かわからない。流行りというのにも疎いらしいし、これが最新機種だと言うことも知らなかった。

「私も新しいの買ってもらったんです」

綺麗なブルーの携帯を持ちながら、赤外線を陸奥と合わせている咲が言う。

傷がないのですぐに新しいとわかる。

「いいなー、俺も買い換えたいんだけど」

「まだ使えそうなのにか？」

もったいない。

風芽にしたらまだぜんぜん買い替える必要なんてないように見える。

多少傷はついているが、機能的には問題なさそうだし。

「結構古いんだぜ？中学入学した時買ったやつ」

「そんなに使ってるのか?!」

俺、最高で1か月もつかどうかなのに……という意味を込めて驚いた。

そんなに驚くことか、と言われたが、すぐに故障させてしまう風芽にとってはかなり凄いことだ。

潰れたり、水没したり、逆パカしたり……そのたびに買い換えている。

仕事用とプライベート用と分けようとも思ったが、二つ持つというのが面倒。

今度の携帯もどれだけでもつことやら。

「物持ちがいいんだな」

「そっかなー？」

「つと、来た」

電話帳に新しく作った『友達』というフォルダに初めての名前。先のアドレスも送られてきて、2人になった。

「あれ？電話帳それだけ？」

「ああ」

友達というフォルダ以外には『依頼』『家族』『支部』『ギルド』のフォルダがある。  
現在表示している友達のフォルダには陸奥と咲の名前のみだ。

「学校の友達って初めてだから」

登録の操作で携帯を見ていた風芽は2人が何も話さないのに気付き、顔を上げる。  
陸奥と咲はあんぐりと口を開け、こちらを見ていた。

「どうした？」

「お、おま……っ」

「風芽さん……っ」

感極まった2人が風芽に抱きつく。  
周囲の生徒は掲示板に夢中な為、気づかない。  
ひしひしと抱きついてくる2人。

「よーし！俺がお前に友達というものを味あわせてやるー！」

「わ、私です！いえ、でも、それ以上でもっ、でもでも、そんなっ」

風芽の頭をわしわしと撫でる陸奥。

何故か顔を真っ赤にして興奮している咲。

「あー……そろそろ、移動しようか」

放れない2人を引きずりながらそこから離れる。

髪の毛はぼさぼさになり、制服も少し乱れてしまった。

未だに陸奥は「そうか、そうか」と言いながら肩を組み、咲は少し離れて歩いている。

「（ど、どさくさに紛れて抱きついてしまった！は、恥ずかしい！）」

「じゃあ咲、俺たち先の教室だから」

「え？あ、はい！」

B1クラスの教室で咲と別れ、風芽と陸奥は端のクラスに近い教室に入った。

教室はかなり広く、40人入っても余裕がありすぎるくらいで、一つ一つの机も広いものだ。

まだそれほど生徒は集まっていないらしく、指定されているわけでもない為、窓際の席をキープする。

一番後ろを風芽、その前が陸奥という順番に座った。

「ってか、風芽はなんで普通科なのさ？」

「なんで、って……」

自分が選んだわけではないし……

「バイトができる、から？」

「へー、バイトやってんだー」

ギルドだと言ってもいいのか、と考えたが聞かれない限りは言う必要もないだろう。

学生でもギルドに登録して金稼ぎしている人間は少なくないらしいので言っても問題はない。  
内容は別だが。

「陸奥は？」

「俺は偏差値の問題。特殊学科って普通科より偏差値高いんだって」

「そうだったのか」

通りで試験問題は簡単だったわけだ。

目立たないように合格ラインぎりぎりの点数を狙ったから解答はいくらか空欄だったけれど。

だいたい中間くらいの成績は保とう。

「俺頭悪くてさあ」

「でも今ここにいるんだからいいんじゃないか？」

「だよなー？」

言えない。

自分にとっては間違える方がおかしい、とは。

そんなことを言ってしまったら即絶交されるかもしれない。

せっかく初めてできた学校の友達。

“普通”の初めての友達だ。

「でさあ」

陸奥が話題を振り、風芽が答える。

意味のない話をして、笑う。

正直にわからない、と言うと教えてくれた。

陸奥は明るくて、いろいろなことを知っていた。

風芽もいろいろなことを知識として知っているが、種類が違った。

彼の、陸奥の話すことは面白い。

時々意味のわからないことを話すが、話題がころころ変わっていく。

生徒が集まってくると、席が埋まっていった。

ちらちらと女子の視線が来るが、無視する。

好奇心の視線だろうと思っていたからだ。

陸奥に「気付かないのか」ときかれ、視線のことかと答えると驚かれた。

「お前、鈍感ではないんだな」

「?何がだ?」

「……あ、いや……忘れてくれ」

## 10 関係

「ってゆーかあ、音楽科のあなたが何で普通科の教室にきてるのかなあー？」

「あなたには関係ないことよ。そっちこそ、どいてくださる？」

「私は後輩君に用があつてきてるんですー」

「私もよ、邪魔しないでちょうだい」

1学年の教室が並ぶ廊下に、上級生らしき2人がドアをはさんで立っていた。

どちらも美人、可憐といった言葉が似合いそうな2人で、見惚れている男子は多かった。

しかし、彼女たちの間には冷たい風と火花が吹き散っている。

前言撤回。



上級生らしき彼女たちがはさんでいるのは開いたドアの向こうに立っている新入生である。

新入生―志方風芽は横にいる友人の笑いに耐える籠った声を聞きながら、ドアの取っ手に手をかけたまま目の前にいる彼女たちを見ていた。

呆れている、とかではなく「どいてくれないかなあ」と呑気なことを考えていたとは誰も知らないだろう。

風芽が2人を見比べていると、ドアが開いたことに気づいたのか、二人同時にバツとこちらを向いた。

『風芽（君）！』

そして、ガシッと片方ずつ彼の手首をとった。

「話があるの、来て」

「私が先！ね、風芽君？」

「どうせ、どうでもいいことでしょう？こっちは”大事な”話なの」

「こっちだって、“2人だけ”の話があるの」

風芽をはさんだまま言い会う美女二人、入試の日に出会ったFランクライセンサーの水留祈とギルドの依頼で護衛をした九条院冷華。

どっちも特に親しいと言うわけではなく、祈はただ偶然知り合った女の子、冷華は仕事上での関係というだけ。

（そう思っているのは風芽だけかもしれないが）

手を掴まれたままの風芽に笑いを堪えた陸奥が話しかけてきた。

「何、風芽、知り合い？」

「知ってることは知ってるけど」

俺は特に話はない、と言おうとしたがそれもさえぎられ、祈が乏しい胸を張って宣言した。

「私は風芽君と秘密の関係があるんだから！」

「ど、どういうこと？風芽」

整った口元をひくつかせ、冷華は手首を握る手を強くしてくる。

別に秘密にするようなことはしていない……ただ、猫を渡してギルドのことを話して道を聞いただけ。

まあ、ギルドのことを秘密にしたいようだったが、風芽には関係ないことで、祈と会ったことすらも彼女の顔を見るまで忘れていたくらいだ。

「まあいいわ。私だって彼とは抱き合う仲なのだから」

『な、なにいいいい？！』

祈だけでなく周囲にいつの間にか集まっていた野次馬と陸奥も思わず叫んだ。

「あの『妖精』と抱き合うだって?!」

「あれ1年生だろ?!」

「た、たしかに顔はいいけど……」

「やだ、イケメン!見て見て」

「冷華様になんてことを!」

「ファンクラブの奴が黙ってないだろ」

「あの先輩可愛いー」

「抱き……ああ、あの（発火野郎から守った）時か」

護衛のためには仕方のないことで、ちょうど体格も冷華は自分より小さいから覆い隠せばけがはさせることはない。  
仲、というのは護衛と対象の関係のことだろう。

「たしかに抱きしめましたが」

「なあっ?!」

風芽の肯定に祈りは手首から手を放し、顔を青くした。  
代わりに冷華が勝ち誇ったように髪の毛を手で払う仕草をする。

「か、風芽君、君は九条院さんと付き合ってるのー?!」

「付き合っているのは恋人か、ということですか?」

「そうだよ!」

「こ、恋人……（何かしら、良い響きね）」

「いえ、特に」

と、即答した後ズガンッと何か硬い物が冷華の頭に落ちる音がした。ほっと息をついた祈は今度はにこりと笑った。

「じゃあ、特に抱きしめる行為には意味はないのよね?!」

「（護衛ということでは）意味はありましたけど」

「意味があるのー?!」（風芽君は九条院さんのことが好きってこと？好きだから抱きしめたの?!）」

「な、なんか噛み合っていないような気がするの俺だけ？」

焦る祈と淡々と答える風芽のやりとりに、一抹の不安を抱え始めた陸奥。

風芽は意外と天然だから、何か言葉が足らなかったり、違う意味で解釈してたりするのもかもしれない、と早くも風芽の性格を熟知してきた。

「水留さん、そろそろいいかしら？」

沈んでいた冷華がいつのまにか涼しい顔に戻っており、風芽の腕に手をまわす。

そして、彼の耳元に顔を近づけ、そっと囁く。

「銃、返したいから来なさい」

その言葉を聞いて銃の存在を忘れていたことを思い出した。自分らしくない失敗だ。

素人に持たせたままだなんて……

「わかりました」

横にいた陸奥に先に帰るように言うと、苦笑しながらわかった、と返ってきた。

祈は納得いかないうような表情だが、風芽がすみません、と言えば静かに帰って行った。

「こっちよ、ついてきて」

冷華の後についてその場を去ると、周囲に集まっていた野次馬集団も解散していった。

風芽と冷華の関係を噂する人間や、謎の三角関係の噂が流れるのはこの後すぐの話だ。

---

空き教室へ案内され、すぐに銃を手渡された。

銃倉を掌に落とし、弾が一発入っているのを確認した。

腰のベルトに挟むようにしてしまいこんでいると冷華が不機嫌そう

な顔で見ってくる。

「なんですか？」

「どうして敬語なの？」

護衛中は誰に対しても敬語なんて使っていなかった。

風芽はプライベートと依頼を分けるため、プライベートでは上下関係を大切にし、ギルドでは常に弱みを見せない為に敬語というものはなくしている。

特に、学校という場所では先輩後輩関係はきっちりとしなければならぬ、と小説で読んだ。

小学校の頃は人間関係がどうのこうのということとはまったく無縁だったため、母にも強く言われているのだ。

「先輩と後輩という区別をしているだけです」

「護衛の時は敬語なんてつかっていなかったじゃない」

「ギルドとプライベートは別です。それに、学校でいきなり訪ねてくるのも俺はどうかと思いますけど」

「なんですって？」

「俺があなたと知り合ったのはギルドの人間と護衛対象という関係上のこと。それ以外には赤の他人……それなのに、あなたは俺のプライベートにずかずかと入り込んで来ました」

呆れた口調で話す風芽に、冷華は何も言わなかった。

「本来ならば俺は水留先輩の相手をしているところです」

彼女はプライベートの時間に出会った人物であり、それでいてギルドの人間であるという小さな共通点もある。  
冷華についてきたのは銃の回収のためだけだ。

「でも……私は」

「銃のことは手間をおかけしました。でも、ギルドと学校は別の世界だということを覚えておいてください」

それだけです、と風芽はドアを引いた。

冷華は呼びとめようと口を開いたが、言葉が出て来ずにそのまま閉じた。

ドアが完全に閉じる手前で、ぴたりと動きが止まる。

風芽は暗い表情の冷華を見て少し考え、しかし何も言わずにパタン、と閉めた。

「あーあ、酷え奴だぜ。ほんと」

教室を出て少し歩き、廊下の角の前で立ち止まった。

「なんだ、君か」

姿を確認し、口調が変わった風芽。

「おい、忘れてたのか？」

「いや……女子の制服着てるから気付かなかった」

角から出てきた声の主は学園の制服、胸元には特進科のバッジをつけている女生徒。

しかし、その目は強く風芽を睨んだ。

「俺だって好きでこんな恰好してんじゃねえ！お前だって知ってんだろうが！」

口調は雑で、しかも短いスカートから見える白い足をだらしなくガニ股にして怒鳴りつけてくる。

「ああ、中身は男なのに女の身体に変えられたあげく、女装癖に目覚めた元泥棒」

「だから好きでやってんじゃねえって言ってんだろ！」

そう、彼女……いや、彼、いや彼女は今はこんな美少女だが元は「男」だ。

名前はコロコロと本業である盗みを働くたびに変えていたが、今では休業して『神楽鏡かぐらきょう』と固定しているらしい。

鏡がこんな姿になっているのは、とあるSAI能力者の能力のせいだ。

なんでも、『逆転リバース』という名の能力で、触れたものの性質を逆に転換してしまうという、風芽の能力に近い能力であった。



その能力者に「性別」を転換させられ、男だった鏡は女になってしまったのだ。

風芽が彼女と知り合ったのは能力が原因だった。

風芽の『連結』という能力の情報をどこからか得て彼女から訪ねてきた。

「何でもするから元に戻せ」と半ば脅しかけるようにして迫ってきたのを、関節決めで落ち着かせて話を聞いた。  
しかし、風芽の答えは一つ。

『無理だ』

その一言で暴れだした鏡を空気で作った透明な壁に閉じ込め、酸欠状態になるまで放置していたこともあった。

「って、その後俺を足蹴にしたことも忘れたわけじゃねえよなあ」

「無理だ、って言っているのに唾を飛ばしてくる君が悪い」

戻せー、戻せーと言葉の通り地面に這いつくばって自分の足にしがみついていた。

「何度も言っただろう？能力者の能力で変えられた存在は、変えた本人でなければ元には戻せないんだ」

風芽のように強力な能力者はそれほどいないが、同じような種類の能力者は多くいる。

その能力者たちの能力は少々特殊な性質を持ち、能力の対象になったものはその能力者の管理下に置かれる。

それを戻したり、解くにはその能力者よりも上の実力者（管理者）が干渉するか、能力者本人が解くしかない。

「俺にも戻せることはできるが、お前の場合、性別という本質的な部分が変わられているし、変換された時に複雑に細胞がいじられる。戻せたとしても99%失敗して完全な『男』には戻れなくなる」

いじられた細胞の構造は複雑に絡み合っていて様々なところに地雷が埋め込まれているようなものだ。

風芽は情報化して読み取ることができるが、それは文字化けして見えるようなものに変えられていると言っている。

それでもいいのか？

「う……それは……無理」

「それで、その能力者を見つけるために日本にいらって聞いたけど、女子生徒になって現れるとはさすがに俺も驚いた」

「ふ、ふんっ！俺だって、お前がまさか女を泣かせて平然としてられる奴だとは……まあ思ってたけど、実際に見て驚いたぜ！」

「泣かせてない」

「いや、泣いてるぞお、絶対」

「事実を言ったただけだ」

「そういうところ変わらねえよな」

薄い茶色の綺麗な髪をガシガシと掻き、腕を組む。

「それで、なんでここに？」

女装云々はどうでもいいとして、日本にいることは知っていたがこの学園にいるとは本当に知らなかった。

泥棒業をしていた鏡が今更学生をしているとは……自分も人のことは言えないが。

「なんだ、知らねえのか？この学園、ギルドと管理局が裏で支援してる。ここにいれば能力者の情報が入ってくるかもしれないだろ」

「支援？」

「ああ、学園内にも能力者は多いらしい。そいつらは皆『特進科』って名前の特別クラスに入ってる」

「へえ」

ちなみに俺も今年入学、と言った瞬間だった。

「っってお前！」

急に胸倉を掴んできた鏡は風芽の胸元を凝視していた。

「なんで普通科なんだよ?!」

「なんでって……俺が選んだわけじゃない」

掴んでいる手を払い、乱れたネクタイを締め直す。

「『能力者殺し』のお前が普通の一般学科とは……」

ちゃき……

ふと、鏡の首筋に冷たく硬い感触が触れた。  
まったく気配を感じなかったためか、ごくりと唾を飲みため息をつく。

「悪い」

手を挙げて冷たい視線を向けてくる風芽に小さな声で呟いた。

「『ここ』でその名は言うな」

「……悪かったって……まじ、ごめん」

「……」

射殺さんとする風芽の眼に耐えきれず、情けない位怯えた声で謝罪した鏡にはっとした表情をして、銃を服の中に隠した。

「ここでは名前で呼べ」

「わかってるよ、風芽」

うろたえながらもそう呼ぶとああ、と返事が返ってくる。  
先ほどの殺気は息を潜め、通常運行に戻ったようだ。

「俺は鏡でいい。つつーか、これからは名前は変えないつもりだから」

ま、お前と同じだ。

そう言って手を差し出してきた。

「お前、いつも握手だろ？最初に会った時もそうだった」

「そう……だったな」

風芽はいつも初対面の人間には握手を求める。

ただ『よろしく』という意味だけではなく、その人間の情報を読み取っているのだ。

『連結』の能力を応用して情報のみを読み取ることができる。

無意識のうちにできるようになったそれは、今では情報収集によく使っている。

しかし、これは違う。

「よろしく『風芽』」

「ああ、よろしく『鏡』」

本当の挨拶だった。

「あ、おい！風芽！」

「陸奥……待ってたのか？」

「せっかくの友達になった記念なんだから、やっぱ遊びに誘おうと思っ  
てよ」

「そうか」

「風芽」

くいくい、と風芽の袖を小さく引くのは興味津津な鏡だ。

誰だ？と聞かれ、「友達」と答えると意外そうな反応が返ってくる。

「ん？おい、風芽その子……」

「神楽鏡といいます。よろしく願いいたしますわ」

「は？」

鏡の言葉づかいに目を点にした風芽を尻目に、おほほとこのお嬢様だと言いたいくらいの外面を披露する。

「風芽君とは昔外国で会ったことがありますて……」

「か、可愛いー！モロ好み！俺、赤石陸奥です！好きです！付き合ってください！」

「一昨日来やがってください」

にっこりと笑い、さらっと流した鏡にひそひそと話しかける。

「それ、何だ？」

「学園Verの俺」

「……」

「うっはー可愛いなあ、さっきの先輩も綺麗だったけど、やっぱりこういう可愛い系が好みだなあ」

陸奥にはこいつが男だと言うことは秘密にした方が良さそうだ。夢を壊してしまつたら……

だが、小悪魔のように陰で笑う鏡を見て、風芽はむっとし、踵で彼

女の足を踏み考えを改めた。

「っ?!」

「陸奥、陸奥にはもっと性格がよくて可愛い子が似合うと思う」

「神楽さんも可愛いと思うけどな」

「鏡は男に興味ないから（男だし）」

「え?! あ……ああ……」

風芽の言葉に少し考え、何か納得したような顔をした陸奥。

「い、ごめん神楽さん……良いお友達でいましょう……」

「（な、なんかあらぬ誤解が生まれたような!?!）」

「（友達は守らなければ）」



## 11 春雪

カサッ……

暗い道に転がる大きな瓦礫に一つの影があった。  
手元には赤い紙があり、それをいじっている。

1つ折り、また折って。

「明日は雪にしよう」

そう言った手には小さな紙の花ができていた。  
両手で掲げたその花を見て満足そうに微笑み、口づける。

静かに立ち上がると、地面にそっとそれを置いた。

「逃げるあなたが悪いの」

だから、逃げないでって言ったのに。

嘲うかのように呟く目の前には、大きな氷の塊が鎮座していた。

「兄様には秘密にしくちや」

踵を返し背を向ける。

氷の塊は壊れることなく綺麗に凍りついている。

その中に”人間”を取り込んだまま……

「新人生歓迎会？」

読んでいた本から目を放しそちらを向く。  
楽しそうに陸奥が言ったのに首をかしげた。

「そ！部活紹介も兼ねてるらしいから、ぜひ！ってさ」

「部活か……」

部活は放課後や休日に主に活動するらしい。

興味はあるがギルドの依頼のことを考えるとそんな時間はないだろう。

悩んでいる風芽を見て陸奥は苦笑いを浮かべる。

「つてか、俺は部活は入らねえけど」

何故、と聞けばバイトをするという。

「中学じゃバイト禁止だったからな。高校生になったからにはバリバリ稼ぐぜ！」

「そうか」

”普通”のアルバイトは高校生からか。

たしか、”時給”とかで金額が決まるってきいたな……と風芽は思い出した。

「ぶっちゃけ、ギルドに登録した方が稼げるんだろうけどさ」

「ギルド？」

陸奥からその言葉が出るとは思っていなかったため、思わずきき返す。

「結構流行ってんだぜ？楽に金が稼げて、自分で仕事を選べるって。」

まあ、ライセンスとるのが難しいらしい」

「流行っているって、学生の間でか？」

「らしいなー……うちの学校の生徒でも何人かライセンス取ったってやつがいるんだってさ」

日本はそこまでレベルが下がっているのか、それとも平和なのか。風芽のギルドライセンスはアメリカで取得したものだ。

治安の悪い地域の支部で取ったもので、そうそうとれる人間はいなかった。

軽々ととれるものでないことは知っているし、国や地域で依頼の難度に差があることもわかっている。

風芽にとってギルドの依頼はバイトのように簡単なものだ。

しかし、それは”風芽”であるが故のことであり、”普通”の学生が簡単に取れるのはおかしい。

「陸奥は興味あるのか？」

「興味はーない！って言ったら嘘になるけど、やろうとは思わねえよ」

「その方がいい」

陸奥は普通の学生でいい。

「ん？」

「いや、歓迎会は行かなくてもいいかなと」

「だなー、あ！神楽さんと咲ちゃん誘って遊びに行くとか！」

鏡と陸奥を会わせてからなぜか意気投合したらしく、いつの間にかアドレスを交換していた。

学生生活で重要な友人である陸奥にちょっかいを掛けるようならば、と策をいくつか考えたが、純粹に男同士(?)で気が合うようだった。

「鏡は大丈夫だろうけど、咲はどうだろうな」

「メールしてみるわ」

あの鏡のことだ。

部活なんて面倒なものに入るくらいなら例の能力者を探さすだろう。それと比べ、咲は芸能科の所属だ。

いろいろ忙しそうなカリキュラムが組まれているのを彼女から聞いていたため、無理なのではないだろうか。

メールを打つ陸奥がふと手を止めた。

開いていた窓から冷たい風が入ってくる。

「しかし、今日は寒いな。雪でも降りそう」

もう春なのにな、と呟きながら携帯操作を始める。

風芽は曇った空を見て目を細めた。

春の暖かい風は今は吹いていない。

「あ」

陸奥が持っていた携帯の画面に白い綿のようなものがついていた。顔を上げれば空から次々に降り注ぐ。

「雪だ」

「ぶえっくしよー！」

その美少女のくしゃみはオヤジのものだった。

「あー、ちくしょう」

「陸奥がいなくてよかったな」

学校が終わり、なぜか校門で待ち伏せてた鏡と下校することになった。

陸奥はバイトの面接時間が変わり、急いで学校を出たためここにはいない。

鏡が一緒だということで残念がっていたが背に腹は代えられなかったらしい。

空を見上げる、というより睨みつける鏡。

「もう四月だぜ？なのに雪とか冗談じゃねえよ」

隣を歩く鏡は少々ガニ股気味で、途中で購入したマフラーに顔を埋めている。

「寒いのは苦手か？」

「俺、南の方の生まれでさ……寒いより暑い方がまだ我慢できる」

手が悴む、とポケットに手をつっこみ、再びくしゃみをした。

元泥棒の面影も何もないその姿に風芽は白いため息をつく。

そういえば俺が寒い地域にいるとき、訪ねてくる姿はいつも重装備だったような。

「お前は平気そうだな」

白い息を吐いているが、平然と手をさらしたまま歩く風芽を恨めしそうに見上げる鏡。

「これくらいは、な。慣れている」

「なんかむかつく」

ずずーっと鼻を吸い上げ、下がったマフラーをつまんであげる。

「もうちょっと女らしくしたらどうだ？」

「俺は男だ！」

「今は女だろう」

その言葉に言葉を失い、ますますマフラーに顔が埋まっていった。

「いつもは女の振りしてんだ。今ぐらい素でいてもいいだろうが」

鏡に親家族はいない。

小さな国の路地裏で隠れて育ったらしい。

人攫いが溢れていたその地で、安眠を許されない生活を送っていた鏡にとって安心できる場所はない。

泥棒、という職業柄友人も何も無く、初めてまともに知り合いになったのは風芽が初めてだという。

「（その点でいえば俺は幸せなのかもしれない）」



「ぶえつくしーい！あー、肉まんでも買ってくか」

「……」

こいつに同情というものは不要のようだ。

呆れていると、どうしたー、とコンビニに入ろうとしている鏡に呼ばれる。

「肉まん奢れよ」

「断る」

「金有り余ってんだろー？」

ギルドの依頼はランクで金額が大幅に違う。

Fランクなどの低さだと何千円というレベルだが、Bランクからは動く金額がかなり大きい。

そんな多額の報酬をもらえる依頼を風芽はこなしてきている。

しかもそれは武器の購入や携帯電話の買い替えなどにしか使わない為、ギルドの口座に国家予算以上の金額が眠っている。

「人にたかるな元泥棒」

「今は休業中だから儲けがねえんだよ」

鏡は元泥棒で、ギルドのブラックリストにのっていたほどの人物。

今ではギルドに投降し更生プログラムを受けたことで一般人と変わらない扱いとなっている。

ギルドに入ることもできるが、本人が言うに「空気が嫌い」らしい。

更生プログラムというのはギルド内にある更生機関のようなものだ。管理局にも矯正プログラムはあるが、それは能力者限定のものである。無能力者の鏡はギルドの更生プログラムを受けた。

更生プログラムを無事終了させれば、ギルドの監視下で通常的生活を送ることができる。

鏡が完全に更生したかどうかはわからないが、今は自分が元の姿に戻れるならなんでもいいと従っている。

「君に使う金はない」

「ケチ」

肉まんを購入している鏡をコンビニの透明な壁越しに見ながら、しんしんと降る雪を手に乗せる。  
体温で溶けてなくなるのを見る。

「やっぱり……」

この時期に雪はないだろ。

「むぐむぐ、もぐひふぁ（どうした）？」

「さっさと帰るぞ」

「もがっ」

気温のせいではない寒気が走り、早歩きでコンビニを離れた。  
後ろを急いで鏡がついてくるのがわかる。

雪のせいで駅までのバスが運休している。

いきなりの降雪で鎖の準備もできなかったのだろう、ほとんどの生徒が歩きか迎えの車を呼んで帰宅。

ギルド支部に寄らない時はバスを利用している風芽も鏡も歩きだ。

さっきからぶーぶーと文句を言っていた鏡も肉まんにかじりついて大人しくなった。

「なんか、また寒くなってねえか？」

うつすらと白かった息が濃くなり、気温が下がった。

ふと、静かな周囲の一方向から嗅ぎなれた匂いが漂ってきた。

鉄の匂い……

いや、『血』の匂いだ。

「鏡」

「んあ？」

鼻をズーズーとすっている鏡は鼻が詰まっっていて匂いがわからないのだろう。

それに、覚えのある気配に風芽は駅とは別の道に足を進めた。

廃ビルが建つ道に入るとさらに気温が下がった気がする。

鳥肌が立つのを感じて鏡は身震いをした。

鏡は立ち止まり、足元に何かが落ちているのを見つけた。

「なんだこれ……折り紙か？」

手に取ったそれはちいさな青い紙で折られた花だった。

「鏡」

「んだよ！」

「しゃがめ」

ドゴオオオオオオン！

反射的に伏せるようにしてしゃがんだ鏡の頭上を何かが通過し、壁に激突した。

パラパラとコンクリートの埃が鏡に降り注ぐ。

「な……」

上を見ればそこに刺さっていたのは巨大な氷の塊……氷柱だった。鋭くとがった先端はコンクリートに突き刺さり、日々ひとつないそれに息を飲む。

「あにさま  
兄様」

凜とした声が風芽の横から発せられた。

驚きもしない風芽の腕にからみつくように抱きつく少女。

「会いたかった、兄様」

「おりはな  
織華」

天然の薄いクリーム色の髪がふわりと舞う雪のように揺れ、ほんのりと頬を赤くしている。

しかし眼は鏡を睨んだまま笑っていなかった。

「織華は寂しかった。兄様は寂しかった？」

潤んだ目で風芽を見上げ、尋ねる少女、織華。

「この雪はお前だろ」

彼女の質問に答えることなく、風芽は言った。

くしゃみをしながら立ち上がる鏡ははっとした表情で振り向く。  
つまらなそうに眉を下げる少女が頬を膨らませる。

「兄様に見せようと思って……それで……」

「お前は無暗に能力は使うなと言っただろ」

「だって」

「今は春だ。わかってるだろう？」

桜は散り、花には雪が積もっている。

今日の雪はイレギュラーすぎる。

風芽の厳しい言葉に織華は言葉に詰まった。

目に涙のため、俯く織華を見て風芽は形のいい眉を下げた。

そして、俯く織華の頭に手を乗せる。

「能力が上がったのはお前を見ればわかる。」

「兄様……」

「こんのお……」

「雪女 あああああ！」

「きゃふっ！」

ぱしっと大きな音と共に織華の後頭部に鏡の強烈なビンタが入った。額に怒りマークが浮かんでいるのが見えるほどに鏡はガルルと威嚇している。

「てめえが能力でこの雪降らせたのか！ ってかさっきの氷柱はなんだあ？！」

殺す気か、と怒鳴る鏡に、織華は冷たい視線を向ける。

「黙れオカマ、兄様に唾を飛ばすな」

風芽を庇うようにして立ち、舌を出す。

挑発するような行動に持っていた肉まんを握りつぶされた。

「この女あ……」  
あま

「鏡、こいつは織華。凍結のSAI能力者だ。織華、こっちは鏡。」

女に見えるけど男だ」

「オカマ」

「オカマじゃねえっていつてんだろ！」

「女装男」

「い、いい度胸じゃねえか……」

「死ぬ？」

一触即発とはこのことだろうか、と風芽は考えたがそれも一瞬で、すぐに二人の間に入る。

「織華、すぐに雪を止ませろ」

「……」

「ぶえっくし！」

雪はやむことなく降り続いている。

織華の能力は強力であるがまだ成長過程で、局地的に雪を降らせるくらいまで強くなっていた。

空気中の水分を凍結させて氷を作るのを得意としているが、強力なものになると人間をそのまま凍らせてしまうこともできる。人間を構成する水分は60パーセントあるといわれている。そのすべてを凍らせれば、人間の死など早いものだ。

しかし、このまま雪が降り続けば生態系が崩れてしまう。



「織華」

「ごめんなさい」

バツの悪そうな表情を浮かべ再び俯いてしまった。  
風芽はそれを見てため息をついた。

「……止められないなら最初からするな」

「ごめん、なさい」

「ま、まさか」

嫌な予感がした鏡は鼻水を垂らし、風芽を見上げる。

「最低でも明日中には止むだろ」

それを聞いた鏡が雪のように真っ白になって凍りついたのだった。

「つか、そこに磔になってる半裸の男は何？」

織華が出てきた方向に壁に両手両足に釘のような氷をつきたてられて磔にされている男がいるのを鏡が見つけた。

「はぐれ的能力者。大丈夫、殺してないから。兄様と約束」

「ちゃんと守っているのか？」

「う、うん」

不安そうに眼を逸らす織華に呆れながらも男を見る。  
開かれた両手の中心に鋭い氷柱が刺さり、首はぐったりとうなだれているが気を失っているだけだ。  
髪を掴んで顔を見るとはぐれ的能力者のデータベースにあった顔と一致した。

「管理局には？」

「どうでもいい」

「……俺がやっておく」

「ぶえっくし！」

「下品」

「うっせえ」

「野蠻」

「ぐぬぬぬ……風芽え、こいつぶん殴っていいか？」

「勝手にしてくれ」

「兄様、織華とご飯食べに行こう」

「だめだ。母さんが家で待ってる」

「マザコン（ぼそっ）」

「なんだ？女男」

「お母様に挨拶……」

「織華、家には入れないからな」

## 12 氷涙

白銀色に包まれた庭を見て掴んでいたカーテンを放した。  
既に雪が止んだ空は青く、雲ひとつない快晴で茶色の地面が見え始めている。

「風芽ー、お弁当は洋風？和風？どうしようかしらー」

キッチンでは楽しそうに包丁を振り回している母が空の弁当箱を手に顔を出した。

「弁当？」

「だって、今日から普通の時間割で授業あるんでしょ？」

「ああ、そっか」

朝食が並ぶテーブルに座り、テレビのリモコンを操作する。  
皿の横にさりげなく置いてある納豆に眉を顰めつつ母が座る方へ退かし、味噌汁をすすする。

今日は白味噌か。

「小学校は給食だったし、お弁当なんて作る機会そうそうないですよ？もう、考えるのが楽しくって」

「好きなようにしていいよ」

「そう？リクエストないならキャラ弁とか作ってもいい？！」

やってみたかったのー、とはしゃぐ姿に首を傾げる風芽。

「（キャラ弁？）母さんがやりたいなら……俺、そういうのよくわかんないし」

キャラ弁とはどういうものだろう、と考えながらも卵焼きを頬張る。

「あ、そうだわ！学校行く前にごみ出しお願いね」

「はいはい」

冷蔵庫を漁りながら置いてある大きなゴミ袋を指して言われた言葉にニュースの天気予報を見つつ答える。

昨日の異常な降雪のことをどこのチャンネルでも流している。

ポチポチとチャンネルを変えているとようやく違うニュースを流しているのを見つけ、リモコンを置いた。

報道されるのは殺人や窃盗などの刑事事件、子供を母親が殺したものの、銀行強盗だの、最近ではよくあるものばかりだ。

ここに流されていなくても、事件なんて発見されていない方が多い。警察も頑張っているんだろうけれど。

ぼーっとテレビを見て口を動かしていると、母が背を向けたまま何

かを呟いた。

「何？」

「その……風芽、お友達はできたの？」

ジューっと油がはじける音と火の調整をするつまみの音に負けそうな声だった。

「学校行けって言うておきながらなんだけど、風芽は嫌だった？」

帰ってくるのは嫌だった？

そう言っている母の菜箸を握る手が少し震えているのが見えた。

いつのまにか母の背を抜いてしまった風芽には、そんな母が余計に小さく見えてしまった。

そんな風にしてしまったのは自分だと自覚している。

母に甘え、逃げるように日本を出た後、彼女は独りだった。

親不孝者……いや、親を不幸にすることしかない自分を思ってくれている母はずいぶんと小さくなってしまった。

「楽しいよ」

小さく笑ってそう言う母が振り返る。

「ほんとに？」

「うん」

「ほんとのほんと？」

「うん」

「お友達できた？」

「うん」

「男の子？女の子？」

「両方」

「彼女は？好きな子できた？」

「フライパン、焦げてる」

大騒ぎしながらも完成した弁当を受け取り、カバンの奥の方に入れておく。

靴を履き、ゴミ袋を掴んで玄関のドアを開けた。

「いってらっしゃーい」

嬉しそうに手を振る母に見送られて外に出ると、道の雪は除雪されていた。

ゴミ置き場の場所は変わらない場所にあり、ネットが掛けてあるだけでなく、きちんとフェンスが設置されていた。そういえばカラスによく荒らされていたな。

フェンスを開け、大きく詰まったゴミ袋を入れた。

扉を閉めようとすると、横から「ちょっと待って」と声がかかった。

「まだ閉めないでくれる？」

大きなゴミ袋を二つ両手に抱えているその人を見て風芽は扉を抑えたまま、「どうぞ」と場所をあげた。

そこから放り投げるようにしてゴミ袋を中に入れ、手を叩く。

もう用はないだろう、と扉を閉めると視線を感じた。

「何か？」

「どっかで会ったことない？」

しかめっ面で訪ねてくる彼女は九十九中央の制服を着ていた。胸のバッジはたしか武術科のものである。

「さあ？学校ですれ違ったとかじゃないですか？」

「ああ、制服同じだもんね……新入生？」

「はあ」

肯定すると納得したようにあっそう、と言って鞆を抱え直す。



「遅刻しないようにね」

背を向けて駅への道へ歩き出した彼女を見て風芽は首を傾げた。  
しかし、彼女も風芽と同じことを考えていたことを知る由もないだろう。

「（あの目、どっかで見たことあるんだよな）」

学校直通のバスは駅から何台か通っている。

学園の生徒の大多数はそのバスを利用するため、一つの時間で3台くらいが続いてくるのだ。

そのバスの1台に乗っていたショートカットの少女、浅見透あさみは吊り皮から手を放し、校門前と書かれた電光版を見て学生証取り出した。

1年通っている学校にすでに慣れきった透は顔見知りにおはよう、と声をかけながら校門に入ろうとした。

すると、視界の隅に黒塗りの高級車が止まり、足を止めた。足早に出てきた運転手が後部座席のドアをあけ頭を下げる。

中から出てきたのはよく知った顔だった。

「冷華、おはよ！」

「おはよう」

鞆を受け取り校門をくぐる九条院冷華の横に並び歩き始める。

彼女たちの付き合いは長いとは言えないが、この学園に入学してから知りあって仲はいい方だ。

音楽科の冷華と武術科の透に接点はない。

最初に話しかけたのは透だった。

『なんか、幼馴染に似てるんだもん』

それが理由だった。

にこりもしない冷華に積極的に話しかけ、ようやく笑ってもらえるようになったのは、冷たい木枯らしが吹き始めたころだった。

そんな人形のような彼女はいつもに増して無表情で、どこか寂しげだった。

「あ、コンサート見に行ったよ」

「ありがとう」

「挨拶行こうとしたんだけど、断られちゃって」

「少し、忙しかったから」

まるで触れて欲しくない、と言っているかのようにそっけない冷華に苦笑いを浮かべる。

「ねえ、何かあった？」

その一言に隣を歩いていた冷華が立ち止まった。  
何事かと透が下から俯いている顔を覗くと眼を丸くしてしまった。

”あの”氷のような冷華が……目元に涙をためて泣くのをこらえているのだ。

「ど、なっ、あっ、え、な、何があったの?!」

「……何もなかった」

それにしても今にもぽろぽろと涙を流しそうだ。

「私には言えないこと?」

「違う……何も、なかったの」

周囲が異変に気づき、ただでさえ冷華は注目されるため近くの木陰に移動させる。

俯いたままの冷華に鞆に入れていたハンドタオルを差し出した。

「何もなかったのに、何で泣くの?」

「泣いてないわ」

強情っぷりは変わらない、と。

「はいはい、心の汗ね。で？」

「……と」

「友達って……どうやって作ればいいのかしら」

「っはよー、風芽」

バスから降りた風芽の肩が小さく叩かれ振り返ると、朝から元気な陸奥がいた。

挨拶を返すと横に並んで歩き始める。

「昨日は雪、凄かったなー」

「今日からは温かいらしい」

予想していた話題に苦笑いを浮かべながらも話を弾ませる陸奥の相手をやる。

バイトの面接の話や雪の思い出や今日からの授業の話など、校門から校舎まで結構距離があるため、かなりの量の話があがった。

「「（兄様／2人とも）おはようございます」」

重なって発せられた声に陸奥と風芽は振り返る。

そこには引きつる笑顔のを鏡と不機嫌そうな表情の織華が制服を着て立っていた。

「おっはよう、神楽さん……と、誰？」

織華と面識のない陸奥ははてなマークを浮かべながらも可愛いなあと顔を緩めている。

鏡より低い身長 of 織華は陸奥と風芽を見上げる。

「織華は織華。兄様の……いわゆる『愛人』」

「「はあ?!」」

愛人Ⅱ愛する人、恋人……現代の日本語としては浮気相手などをさす。

驚く陸奥と鏡を尻目に風芽はため息をつく。

「意味分かってるのか？」

「愛する人、織華と兄様は真っ赤な糸でつながってる」

「か、風芽っ、お前って子は九条院先輩や咲ちゃんだけでは飽きたらず……」

恐ろしい子っ、と馬鹿なことを言っている陸奥の頭を小突く。

頬を赤らめて恥ずかしげもなく風芽に抱きつこうとしている織華の頭を掴んで止める。

「こいつは妹分で織華。織華、こっちはと、友達の陸奥だ」

改めて言うのと恥ずかしいと思いつつながら風芽は織華を陸奥と向かい合わせた。

「俺は赤石陸奥。よろしく、織華ちゃん」

悪意のひとかけらもないその笑みに、織華は風芽の手を握り、ちらちらと様子を見てくる。

目で指示すればもじもじと前に出た。

「白河……織華」

「名字あったのかよ」

ぼそっと呟いた鏡に織華は陸奥に見えない角度で、その足を踏みつけた。

痛みに耐える鏡は陸奥の前ではいまだにお嬢様演技を続けている。そんなことに気付いていない陸奥はニマニマと話しかける。

「俺のことは陸奥でいいからね」

「兄様の友達、だから……織華って呼んでもいい」

風芽の手を掴んだまま話す織華は気を許している。あまり人に懐かない織華にしてはだいぶ珍しいケースだ。

「ね、ねえ？そろそろ教室に行きませんか？」

薄らと涙を浮かべながら鏡が間に入ってくる。

携帯の画面を見るともういい時間になっていた。

「そうだな。織華、お前は遅れて入学ってことになってるんだろ？」

「はい」

「とりあえず職員室に行けよ？」

「……はい」

そう言って別れるまで手を放すことがなかった織華は名残惜しそうに手をワキワキと動かしながら職員室の方へ歩いて行った。

教室が同じな風芽と陸奥、それに実は隣のFクラスだった鏡は教室へ向かった。

そして放課後、嵐はやってきた。

「志方風芽ええええええええええ！面をかさえええええ！」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7549u/>

---

現代ギルド

2011年10月17日12時50分発行